話せる俺と、騒がしい学園生活

世良灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
話せる俺と、騒がしい学園生活

【Ｎコード】
Ｎ０５３４Ｗ

【作者名】
世良灯

【あらすじ】
超能力者たちが全人口の約５％を占める時代。超能力者である俺はこの春から超能力者専門高校、朝陽学園に入学する。俺のメルヘン（笑）な能力なら、平穏無事な学園生活を送れると思っていたが、周りの奴らがそうはさせてくれない。毎日毎日、騒いだり爆発したり殴られたり……。別に俺はこんな刺激的な日常は求めていないんだっ！！話せる俺と、騒がしい日常生活の中でのラブ＆コメディ！？今、始まる！！
※Ｒ１５は保険です。

辛口コメントＯＫです。
気付いたらＰＶ１万５千達成、感謝！！

第一話　話せる俺と、プロローグ

桜が咲き誇る四月。
俺、桜庭黒治（サクラバ　コクジ）は学園に続く道を歩いていた。

朗らかな太陽、咲き乱れる桜、涼しげな風、そのどれもがこれからの学園生活に期待を抱かせてくれるように眩しかった。

ふと視線を前に移すと、一人の生徒が、散っている桜の花びらを宙に浮かせ変な模様を描いていた。それを隣の友達に見せお互いに笑いあっている。

こんな珍妙な出来事を見たら、昔だったら目を見張っていただろう。しかし、今は馴れきってしまっている。

なぜなら、世界に超能力なるものが認知されて早五十年。そして俺達が入学する予定の高校が朝陽学園、日本に数少ない超能力専門高校だからだ。

◇◇

欠伸を噛み殺しながら、ぽけーっと歩いていると、後方から声がかすかに聞こえてきた。

「「おーぃ！　……！」」

よく耳を澄ますと、誰かを呼ぶような可愛らしい声が二つ重なって聞こえてくる。

こんな可愛らしい声の子二人に声をかけてもらえるなんてまったく……どこのどいつだよ、けしからん。

それがだんだんと近づいてきて、声が鮮明に聞こえてきた。

『『おーい！　コクジー！！』』

俺だった。

誰だ？　こんな息ピッタリな知り合いなんて、俺にはいないはずだ……ぞ……？

「……まさか！」

振り向き確認する。

確かにこんな自由闊達そうで、息ピッタリの声を持つ“人”を俺は知らない。しかし、俺はこの声の主を知っている。

この声の主は、とても可愛らしい姿をし、同じ日に産まれ育った双子の――

『『コクジ！　おはよう！』』

――雀だったな……。

◇◇

『『コクジ！　ナンでムシする？』』

俺の少し後ろを旋回しながら抗議してくるが無視無視。今ここで

あいつらの相手をするのはマズい。

もし雀と喋りながら歩く男子生徒を見たらどう思うだろうか？

俺だったら絶対に近寄らないか、いい病院を紹介するの二択だろう。

つまりここで話してしまうと、

？おい、あいつ雀と喋ってるぜ

？春だからな……しょうがねぇよ……

？まぁ何にせよあいつはアブないな、近づくのはやめよう

という方程式ができあがってしまう可能性がある。

実際に中学時代は、最初にこの方程式が出来上がり苦労したからなぁ……。

というわけで無視するのが一番！　つか、入学式は俺の能力をわからない奴もいるから近寄るなって言ったのに忘れたのか、さすが鳥頭……。

などと考えていると、

『マァいいヤ！　カタにトまろ！』

『ソウしよウ！』

雀姉妹が俺に近づき、肩に降り立たった。

結果、シュールな俺が完成した。

（……何してくれちゃってんの！？）

こんなもん駄目だ！　メルヘンチック過ぎる！！

なんとかどかそうとしていると、少し後ろから会話が聞こえてきた。

「見て国子、あの人雀肩に乗せてるよっ」

「ホントだ！　おもしろ～いっ」

なんと予想外なことに、彼女たちになかなかの好印象を与えたらしい。

いや～、これはこれで悪くないのかな？　ははっ。

続いて会話が聞こえてくる。えっとなになに、

「でもちょっと近づきたくはないよね……」

「うん、メルヘン過ぎるね……」

前言撤回。

このままじゃ俺のあだ名が知らないところでメルヘンになってしまうかもしれない。

歩みを遅くし、彼女達が近づくのを待つ。

しかしむこうも歩みを遅くしてきた。警戒されてる……。

むぅ、こうなったら俺から近づくしかないのか……。

「あのさ、」

「「ひぃっ！？」」

意を決して声をかけつつ近づいたら、肩を抱き合い、物凄い勢いで後ろに下がられた。

そりゃまぁ、近づきたくないって言ってたメルヘンが話しかけながら近づいてきたらそうなるわな……。

急いで弁明せねば！

「あのさ、これはねって待って！　通報はまだ早い！　携帯を閉じて一回俺の話を聞いて！！」

携帯を取り出した女生徒を制止する。雀を肩に乗せて話しかけただけで通報されかけるとは……。

「な、何の用ですかっ！？」

携帯を握りしめ、細かく震えながら聞いてくる。

やめてよ、周りから見たら俺、暴漢に思われちゃうじゃん……。

「……あのさ、これは俺の超能力のせいなんだよ」

「「あぁ～」」

すぐに納得した様子の彼女たち。何なのだろうこの変わり身の早さは……。

そもそも、今から行くところは超能力専門高校なんだからまずその可能性を考えてほしい。

「だからコイツら勝手に寄ってきちゃうの」

肩の雀を指差しそう言う。

雀が肩で『ヒトにユビをサすなとオシえたのはコクジだろ！』『ソウダソウダ！』とか騒いでるけど気にしない。そもそもお前らは人ではない。

雀がピーピー鳴き出したのを見て目の前の女生徒は笑みを溢した。俺が鳴くように指示を出したとでも思ったのかな？

「雀を操る能力なんですか？」

案の定、一人が軽く笑いながら予想通りのことを尋ねてくる。うんうん、好印象好印象！

「いや、ちょっと違うな、俺の能力はい」

『ん？　何カ聞き覚えのある声しなかったカ？』

そこまで言いかけた時、何やら不吉な声が、風に乗って聞こえてきた。

思わず声を止めて耳を澄ます。

すると周りの木々から、他の声が聞こえてきた。

『あれ？　今の声黒治じゃなかった？』

『だよな、ってあれ、黒治じゃねぇカ？』

『ホントだ、黒治だ』

『ちょっかいかけに行こうよ』

『お、僕も行くよ！』

『オイラも！』

『面白そウね、私も行くわ』
『ワシも』『拙者も』『おいどんも』『某も』『ミーも』『朕も』
ｅｔｃ．．．

なんてこった！
この声は他の鳥たちの声じゃないか！！

くぅ！　声を出したことが裏目に出たのか！
「？　どうしたんですか？」

言葉が止まった俺を不思議そうに見つめてくる女生徒。
マズい、ここにいたら彼女たちも巻き込まれてしまう！

「話の途中だけどごめん！　先行くわ！！」
「あっ！」

そう言いダッシュで彼女たちから離れる。

それと同時に木々からは、多種多様な鳥たちが一斉に羽ばたいた。
『『『コクジィィィイイ！！！！！　遊ボォォォオオ！！！！！』』』
「ふざけんなぁぁああ――！！！！！」

激走虚しく、瞬時に追い付かれて鳥の塊に捕らえられた……。

◇◇

「ねぇ、あの人雀だけじゃなくてすごい数の鳥に追いかけられてたね……」

「うん、雀じゃなくて鳥を操る能力だったんだね……」
「でも、うまく操りきれてないね……」
「うん、……メルヘンな能力だったね……」
「メルヘンだったね……」

鳥の塊の中で、何故か俺はあだ名がメルヘンになってしまうような悪寒に襲われた……。

第二話　話せる俺と、契と鳥

超能力。

かつて、人間なら誰しもが一度は欲したことがあるだろう力。

やれ炎を出す、やれ心を読む、やれ透視するなどの、そんなＳＦの力。

非現実的な絵空事、所詮それは空想で終わるはずだった。

しかし五十年程前、唐突に超能力を持つ者たちが続々とこの世界に現れ始めた。

炎を操る、心を読む、透視をする、そんな人が何人もいる。そんな状況に世界は大いに混乱した。

だが、二度の世界大戦を経験している人類は、さほど大きな大戦も起こさずにその混乱を収め、早々に超能力の友好的な使い方を模索し始めた。

そんな中で国が考えた一つの政策に“超能力専門の学校をつくり、超能力者としての教養を身に付けさせる”というものがある。

そしてここ朝陽学園も、その政策によって創られた学校の一つである。

◇◇

「俺に何か言うことない？」

『メンゴメンゴ～☆』←カラス

『あーいとぅいまてぇーん』←燕
「……」

鳥、襲撃。から約十分。
鳥たちに囲まれながらも、俺は何とか人目のつかない校舎裏まで来ていた。

そして説教を始めようとしたらいきなりの舐めくさった態度。
一発しばいたろかと思ったが我慢我慢……。相手は一撃で死ぬような鳥なんだ……。

「……お前らさ、俺が言ったこと忘れてたろ？」
『俺は覚えてたぜ？　他と違って賢いカラな』
『俺も覚えてたッての！　このちっこいボディ舐めんなよ！？』

そう答えるカラスと燕。
他の鳥たちは雀姉妹とギャーギャー騒いでいる。この二羽を除いた奴らは単純に俺の話を聞いてなかっただけだと思われる。

「ほう、ならなんでお前ら二羽は率先して襲いかかってきた？」
『『ノリで？』』
「死にさらせっ！！」

思わず足を振り上げる俺。しかし華麗に避けられた。

「忘れてたのよりタチ悪ぃ！　なんなのお前らは！？」
『いやーだってさ、俺たちと話せる人間なんて黒治だけだもん、なー？』
『そうそう、恨むんならお前の能力を恨むんだな』
「今日だけは我慢してくれたっていいだろーがよ……」

当たり前のように言われ、怒気が削がれる俺。

コイツらが言うように、俺は鳥と会話できる。

俺の超能力は“生き物との会話”。鳥に限らず犬や猫、牛や蛙、はたまた魚と会話することができるのだ。なぜか虫とは会話できないのだけれども。

動物と話せるなんて便利な能力じゃないか、と思うかもしれない。確かに便利だ。だが俺はあまりこの能力が好きではない。

動物からしてみれば自分達と話せる人間は最高に役立つのだ。

結果、今朝のようなことが多々起きるし、他にも色々と巻き込まれる。なので俺はこの能力が便利不便は別として好きではないのだ。

……ついでに言えば俺だって炎とか雷とか出したかったさ！悪いか！？

『黒治、厨二オーラが出てるぞ？』

『カラス、そっとしとくのが優しさッてもんだ……』

「えぇい黙れ！」

無駄にこの二羽は人の心中を察するな！

コイツらに話の腰を折られたけどまぁとにかく、これからもこんな調子だったら困るからな、ここは全員にガツンと言っておかないと。

「あのさ、よく聞けよ？　俺にも『豆よこせ』俺の都合『豆』ってもんがある『よこせマメ』んだ、だから時と場『俺は肉がいい』所を選んで話しか『イモムシない？』けてほしいのよ『パンのミミでいいよ！』ってかお前ら話を聞けよっ！！！」

毎回毎回何なんだよこの鳥たちは！？　見せしめに一羽ほど捻り潰してやろうか！？

などと物騒なことを考えていると、雀姉妹が俺の前にやって来て、

『『コクジ！　アサゴハン！』』

と無邪気な声で言った。

「……あーもう！　しょうがねぇなぁ……」

マイペースな鳥たちに呆れつつ、俺は鞄から『鳥の餌（８００円）』を取り出して辺りに撒いた。

それを鳥たちが我先にと啄み始める。

『黒治って雀姉妹には甘いよね』←椋鳥
『あいつら小さい時ハ黒治が育てたからな』←鳩
『自分の子は可愛い、みたいな？』←ホトトギス

「はいはい、無駄口叩かないでお前らも食べましょうね。雀姉妹ガトリングガンみたいな勢いで食べてるからね」

余計な事を話す鳥たちを気にせずに、言葉通りに凄い勢いで啄む雀姉妹。

『あっ！　お前たち、ちょっとは自重シろよ！』←四十雀
『『この世は弱肉強食也……』』
『くそ！　イつもの片言じゃねぇ！！』←ウグイス
『黒治！　止めろ！』←キツツキ
『クズ黒治！　止めろ！！』←カッコウ
『早く止めろよ！　カス！』←コマドリ
「何故にそこまで罵倒されんの！？」

ギャーギャー毒づく鳥たちにツッコミを入れつつ、さらに餌を撒く。

『『我、速さの限界に挑む者也……』』
『なっ！？　まだ速さがあがる……だと……！？』←アヒル
『負けてられねぇ！　てめぇら食うぞ！』←鴨

騒がしく啄む鳥たちを苦笑しながら見つつ、体を伸ばす。

うーん、朝から無駄な運動しちまったなぁ。全身伸ばしとくか。

「お前たち喉つまらすなよっと」（グググ）
「黒治、おはようだ」
「しぇぇぇえぇい！！！！」（ググキョッ）

なんか体のどこかからヤバい音がしたけどそれどころじゃない！

鳥と会話しているという大変メルヘンな場面を見られたか！？
あ、大変メルヘンってラップに使えそうって違う！！

この状況を見られてしまったのか！？　このままじゃヤバい！！

逃げられる前に殺…じゃない、説明しないと！！

「死ねぇぇい！！」

『殺すんかい！？』←カラス

カラスが何かツッコミを入れてきたが構ってる暇はない！！　俺には成さなければいけないことがあるんだ！！

振り向き、拳を振り上る。まずは喉を潰し、助けを呼べないようにする、その後は脛椎を……！！

と、勇んだころで気づく、この垂れ耳は……。

「……どうしたんだ黒治？」

「契かよ……、知らない奴かと思ったじゃねぇか……」

「？」

息をはき、拳を下げ、脱力する。

声をかけてきたのは、俺の知り合いだったようだ。まぁ考えれば名前呼ばれてたから当たり前か……。

クエスチョンマークを浮かべているこの垂れ耳少女は葛原契（クズハラ チギリ）、俺と同じ中学出身の超能力者だ。

健康的な肌の色に、くせっ毛のようでありながら、絹糸の様な肌触りの髪、切れ長な眼にスラッとした四肢が魅力的な少女である。

更に特徴的なのは、頭から生えている犬科のような垂れ耳と、腰辺りから出てるふさふさの尻尾。

この姿は彼女の超能力（とでも言えばいいのか）、“人狼化”の影響である。なぜ狼なのに垂れ耳かって？　そんなのは知らん。

そんな彼女が、尻尾をふさふさ揺らしながら俺に近づいてきた。

『来たよ狼少女』

『ん！　パンツ見える！』

『燕てめぇ！　背が低いカラって調子乗んなよ！　何色でしたカぁ！？』

『水色だね』

『ありがとうございまぁス！』

「黒治、こいつらは何て言ってるんだ？」

契が、契をネタに猥談をし始めた燕とカラスを指差しながら聞いてくる。

すごい、何か動物的直感でも働いたのだろうか？

『黒治！　言わないで！　この前みたいに殺されちまう！』

『見たのは燕だけだカラな！　俺は聞いただけだカラな！』

『あッ！　てめぇ汚ねぇぞ！』

必死に懇願する燕とカラス。

そうだよな、朝にいろいろあったけど、こんなか弱い鳥たちを売ることなんてできないよな……。

俺は優しく二羽に微笑みかける。

『黒治、スまねぇな』

『恩に切るぜ』

「この燕とカラスが契のパンツトーク」
『『黒治て（テ）めぇ！！』』

朝の恨みじゃボケ！
空に飛び立とうとする燕とカラス。しかし契に一瞬で捕まる。

『くそッ！　狼のスペックに俺たち鳥類は敵わないのか！？』
『燕よ、俺にいい考えがあぶぅ！』
『カ、カラスーッ！！　せメていい考えを教えてぇ！　あッ、痛い！　止メて！　ごメんなさい！！』

羽を一枚もぎ取られるカラスと頭の毛を抜かれる燕。

「まったく、少しは俺の気持ちがわかったか」
『『俺たちは暴力に訴えかけたことはねぇ……』』

まぁいい気味だとしか思えんな。

「……黒治、何色だった？」

カラスと燕を投げつつ問いかけてくる契。
何色だって？えっと確か……、

「水色だろ？　……ってしまったぁ！！」

つい答えてしまった！　くそ、俺も対象なのか！？

捕まってむしられまい！　と構える俺。しかし契の手は伸びてこなかった。むしろ、

「う、うん、水色。でできれば、忘れて……ほしい……けど！」

なんて赤面しつつ、尻尾をふさふさ、耳をピコピコ動かしながら言ってきた。

あぁそうだった……、

「黒治が！　……黒治が、覚えていたいんなら……覚えてて、いい……ぞ？」

普段は冷静なのにちょっと恥ずかしい目に合うと何故か男心をくすぐるような事を言ってしまう。

契はそんな、天性の男殺しだったな……。

「それとも……ちょ、直接見た方が、いい……か？」

「えっ、ちょくっ！？」

素晴らしい提案に動揺していると、暴走中の契がスカートの端に手をかけ、躊躇いがちに上げていく。

白く、艶かしい太ももが少しずつ見えていく。なんでこんな状況なのに小さく尻尾振ってんだよっ……！！

徐々に上がっていき、もう少しで付け根の部分に到達しそうだ。

眼は潤み、蒸気した頬が、より扇情的に……って！

「お、落ち着け契ぃ！　直接見せなくていいからっ！！」

「そ、そうか？　……そう、なのか……」

と手を離し、顔を真っ赤にし、尻尾を垂らしながら言う。

何で残念そうなんだよ！　見てほしかったのかよ！？　そうだとしても俺の純情ハートじゃ直視なんてできませぇん！！

『あぁ、俺の羽根一枚が……』

『お前はまだマシだよ……俺なんてこの蠱惑的ボディに十円ハゲだぜ……？』

『蠱惑的ボディについては後で議論スるとして、椚山動物園のハゲワシみたいになってるな』

鳥たちのバカな動物界トークでなんとか意識を逸らす。えぇっと、何か話題は……！

「そ、そうだ！　何か用か？　契？」

「う、うむ、魁念が探していたぞ？」

徐々に普段通りのクールな状態に戻りはじめる契。よかった、ドギマギしないですむ。

えぇっと、魁念だっけ？

「……あ、今朝一緒に行く約束してたの忘れてた。まぁ魁念だからいいか」

「黒治がいいならそれでいいと思う。それと黒治、また同じクラスだ」

尻尾をふさふささせながらそう言う。

「お、じゃあ今年もよろしくな」
「うむ、よろしく頼む」

契と同じクラスは素直に嬉しい。仲もいいし何より可愛い。俺の純情ハートにはけっこう厳しいかもしれないが。

「他には誰がいるんだ？」
「確か魁念も一緒だったな」
「またか……」

魁念も、中学時代は同じクラスだった悪友だ。
あいつらがいるなら退屈しなくてよさそうだな……。

「後はあまり見かけたことのない名前ばかりだったな」
「なるほどね、んー、とりあえず教室に向かうか」

新しいクラスの面々も気になるし、最初から出遅れてたら友達もできない。
それに、こんな鳥どもの相手をするよりも教室に行く方が断然有意義に思える。

「んじゃ、俺は教室に行くから」

そう言い、鳥の餌を全て撒く。

「校舎内には入ってくんなよ？」
『わかってるって』
『いってらいってら』
『『コクジ！　イってらっしゃい！！』』

鳥たちに見送られ俺と契は教室に向かった。

第三話　話せる俺と、クラスメイト

「あ、メルヘン君」

俺たちの教室、１－Ｂに入ると同時に、ファンシーな名前で迎えられた。

誰だ！？　俺をメルヘンなんかと呼ぶ奴は！？

「ってあれ？　確か今朝の……」

「うん、メルヘン君同じクラスだったんだ、よろしくね～」

と、手をひらひらさせながら話しかけてきたのは、今朝少しだけ会話をした女生徒の内の一人だった。

よくよく見ると、長い髪をサイドポニーにしていて、張りのある胸や、健康そうな手足が魅力的な少女であり、活発そうな目や口元が契とは違ったベクトルの美少女だなと感じさせる。

今朝あんなことがあったのに、積極的に声をかけてくるとは、物怖じしない性格なんだなぁ。

「こっちこそよろしく。後、俺の名前は桜庭黒治。メルヘンじゃないからな？」

「うん、コクジ君ね？　りょーかいっ、私は相良春（サガラ ハル）。ハルって呼んでね」

と挨拶を交わす。

そんな俺たちを、契は不思議そうに見ていた。

「？　黒治、知り合いか？」

可愛らしく小首をかしげ、尋ねてくる。

あぁそうか、契はあの時いなかったから状況がわからないのか。説明してやらないとな。

「あぁ、ちょっとな。今朝俺が」

「怯える私に無理矢理声をかけてきたんだよ」

「黒治……」

「違ぁう！　別に無理矢理ではなかっただろ！？」

契が非難がましく見つめてくる。

ハルめ、いきなりなんて事を言い出すんだ！

「それで嫌がる私の手を握り、物陰に引っ張って……」

「黒治……！」

「それは純度１００％の嘘！　契さん、信じて！！」

「そしてコクジ君が無理矢理私を……」

「黒治……！！」

「痛っ！　ちょ、女の子なんだからグーはやめてっ！」

殴りかかってくる契を何とかいなしていたが、足払いされ、マウントをとられた。

そしてそのまま殴打の嵐。酷い！！

その間、ハルはあははっと笑い続けている。悪ノリしやがって！

……さては朝もわざとオーバーなリアクションをとってたな？

しばらく笑い続け、契が落ち着いたところで、
「メルヘン君たちおもしろいね～。安心して彼女さん、冗談だよっ」
「いてて、言うのが遅いっての」
と、ネタばらしをした。

ハルの言葉の前半部分は、契の攻撃で耳がやられていたからなんて言ってたか聞こえなかった。
けど最後の冗談だよって声だけは聞こえたからな、まぁ安心だ。
まったく、契は冗談とかに疎いんだからやめてほしい……。
一応、ちゃんとわかったのか確認しとかないとな。

「契、ちゃんと冗談だって理解したか？」
「彼女……私が黒治の、彼女……」
「あ、あれ～？　契さん？」

なんか顔を赤め、心ここにあらずといった感じでボーッとしてる。
もしかしてこれは聞いていなかったか！？　ちゃんと言っとかないとまた攻撃されちまう！

「おい！　おい、契！」
「彼女、かぁ……はっ！　な、なんだ黒治？」
「わかってると思うけどよ、さっきのはハルの冗談だからな？」
「え？　冗談……？」
「そう冗談。ったく、そんなわけないだろ？」

まったく、契は俺が朝っぱらから変態的行動をするとでも思って

るのか？

「そ、そんな！　酷いぞ黒治……」
「えぇ！？　何で！？」
「私に期待をさせておいて……！」
「何を期待してたんだよ！？」

まさか変態的行動をしてほしかったのか！？
いーや、ダメだダメだ！　考えを改めさせないと！！

「あははっ、コクジ君たちは面白いねっ」
「そんな笑ってないで契の考えを改めさせるのを手伝ってくれよ！」
「黒治にとって私は遊びだったのか！？」
「何の話だよぉぉお！？」

結局、契を落ち着かせるのに数分かかった。

◇◇

「花沢中の相原卓です。能力はありきたりですがパイロキネシスです。よろしくお願いします」

あの後、ハルに契を紹介したりしている間に、ＨＲの時間となった。

やってきた先生が軽くカリキュラムなどを説明して、そのまま自己紹介に移らせる。
言うことは最低名前と出身中学、あとは能力らしい。

パッと見たところ、うちのクラスには外国人が一人いるだけの、

平凡なクラスのように思える。

これなら平穏無事な学園生活を送れそうだ……。

「ニブルヘイム出身、“黒衣の騎士”ドゥンケル・ハイト。能力は負の遺産である【邪神の記憶】だ。俺に近づき過ぎると闇に飲まれちまう。あまり近づかないことだな……」

いきなり平穏無事な学園生活が遠退いた気がする。

自己紹介している男子は、右目には眼帯、左目には恐らく赤のカラコンを、左手は包帯でデコレーションしており、右手からはチョーカーがぶら下がっているという風貌である。

そして包帯を巻いた左手は今、顔を覆うようにして格好つけている。

どこの邪気眼だよ……。

よくよく見ると着ているものも制服でない。何なのあの漆黒のコートは？

「えー、菱名中出身の大貫太郎（オオヌキ タロウ）君ですね」

先生が解説をしてくれる。

太郎て、そんな平凡な名前なのに！

「そんな名前、とうの昔に捨てたさ……。今はドゥンケル・ハイト、ただの闇さ……」

「えー、彼の能力の【邪神の記憶（笑）】は、単なる“サイコキネシス”ですね」

「子羊の指導者よ！　それを口に出してしまったら機関の奴等に気づかれちまう！！」
「じゃあ次の人どうぞー」
「Ｓｈｉｔ！　まさかコイツは機関の奴等とグルなのか……？」
……まぁあんな奴が一人いるぐらいなら大丈夫だよな……？

◇◇

「みなさんこんにちはっ、柏中から来た萌え萌え魔法少女、上遠野（カトウノス）簾（ダレ）ちゃんですっ、にゃはにゃはにゃん♪」
もう一人いた。
何だ！？今度は電波系か！？
「えっと、自己紹介って、あとは何を言えばいいんだにゃ？」
『『『超能力だよ！　簾ちゃん！！』』』
「にゃはっ、ありがとにゃん♪」
『『『にゃぁぁーん！！』』』
なんか、こう、オタクっぽい男子が、まるでアイドルを崇拝するかの如く熱狂している。
……まぁ確かに、目がくりくりとしているし、愛らしい唇やスッとした鼻などと、どこをとっても可愛らしい顔立ちをしている。
更に、格好はただの制服だが、髪型はツインテールと珍しく、身に付けている小物が彼女の魅力を引き立て、どことなくアイドルらしく見せているような気がする。

「私の能力は【マジカル☆ハッピー☆ハンド】ですっ、よろしくにゃん♪」
『『『よろしくにゃん！！』』』
ただ、振る舞いを見るとアイドルというよりは、アニメの萌えキャラのように思えてくるな……。
クラスメイトたちが不審そうな顔をしていると、またもや先生が説明をしてくれた。
「えー、みなさん知ってるとは思いますが、彼女は萌え萌え魔法少女スダレちゃんとしてデビューしているアイドルです」
いいえ、先生。
そんな名前のアイドルは、みなさん知っていないと思います。
それとあのふざけた名前の能力の詳細は教えてくれないのですね。
「先生も恥ずかしながらファンでしてね……、スダレちゃん、後でサイン貰えますかね？」
「わかりましたっ、後で職員室に伺いますねっ、にゃんにゃん♪」
「でへへぇ、にゃんにゃん♪　あ、次の人お願いします」
まだ大丈夫、2人ぐらいならきっと俺の生活に支障はきたさないだろう……。

◇◇

「えー、鬼灯胡桃さんは、今日は欠席ですので、次のボブ・スティール君お願いします」

「アハ〜ハー！　アメリカかり来た、ボブ・スティールです！　パイロキネシスです！　シュミは焼却、トクギは溶解、ザユーのメーは“とりあえず焼け”デス」

今度は違う意味で危ない奴がきた。

何で趣味とか特技とかはカタコトなのに焼却とか溶解って言葉が流暢なんだよ……！！

ボブと名乗った男は、１９０はあろうかという身長に、筋骨隆々でシャープな肉体、ネグロイド系の肌の色と、近くにいられたら暑苦しそうな体型が特徴の外国人だ。

あれでパイロキネシスって似合いすぎだろ……。

「ボブ君は両親の都合で三月の半ばに日本に越してきたそうです、向こうの学校はどうでしたか？　ボブ君？」

先生がまたまた補足説明と質問をした。

教育者としてやはり向こうの学校とか気になるのだろうか？

「ボクがスクールを全焼してしまったノデ、扱いがザツでしたね、アハ〜ハー！」

『『『……』』』

先生も生徒も思わず沈黙してしまう。

これは親の都合で越してきたんじゃなくて、アメリカの学校じゃどこも受け付けてくれないから日本に来たんじゃないだろうか……。

なんか、平穏無事な学園生活は無理な気がしてきた……。

◇◇

その後はありがたいことに、普通の自己紹介が続いた。

俺自身も、自分は動物と話せる能力だ、ってことを強調する以外は普通の自己紹介だったと思う。

途中、簾さんに

『えーっ！　羨ましいなっ、私も猫にゃんとお喋りしたいにゃん♪』

『『『にゃんにゃーん！！』』』

と絡まれたような記憶もあるが気のせいに違いない。

今日の日程は朝のＨＲ終了後、体育館で入学式。その後また教室に戻り、教材を配布して解散、というものらしい。

そのため現在俺は、契、ハル、魁念と一緒に体育館に向かって歩いているところだ。

「黒治、お主は拙僧との約束を忘れていただろう？」

「忘れてねーよ、故意にだ」

「忘れるのよりタチが悪いぞ！？」

朝に鳥たちと繰り広げたような会話をしているのは田沼魁念（タヌマ カイネン）。

中学からの同級生で、今年も同じクラスになった悪友だ。

魁念は家が寺なこともあってか、こんな珍妙な名前で、ついでに

剃髪をしている。更には自分のことを拙僧、相手のことをお主と言う徹底ぶり。

しかし今時、そんな聞いたこともないような一人称や二人称を使うので、本物なのに“エセ坊主”なんて言われている。

「冗談だ魁念、実は理由があったんだ」

忘却という。

「どうだかな。お主は平気で人との約束を破るような男だからなぁ」

魁念が疑うように眉を細める。

「違うのよカイネン君、コクジ君は朝、私とちょっと、ね……」

そこにフォローを入れてくるハル。

もしかして今朝のことを言ってるのか？

別に、あれのせいで魁念との約束を破ったわけではないけどなぁ……。

まぁ説明するのもめんどくさいから、そうゆう事にしておこう。

「そうなんだよ、ちょっとな」

「む？　黒治はハル殿と何か一悶着があったのか？」

「そうそう、その通りなの。実はね――」

気づくと、いつの間にか輪に溶け込んでいるハル。

この光景を見ると、ハルのような社交性のある奴と仲良くなるの

は良いことだな、と再認識させられる……。

「――コクジ君は朝から私を襲ってたの！！」

気づくと、そこだけ大声でデタラメを言うハル。

この台詞を聞くと、ハルのような人を貶めるような奴と仲良くなるのは悪いことだな、と再認識させられる……。

「ちょっとお前黙ろうか？」

「いやっ！　黙らせて何するつもりなの！？」

「がぁぁあ！　めんどくせぇ！！」

「君、もうすぐ体育館だから静かにしなさい」

何故か俺だけ先生に怒られる。理不尽だ……。

◇◇

つまらない入学式は、暖かなな陽射しにウトウトしていたらいつの間にかに終わっていた。

そしてそのまま教室に戻り、教材を受け取り、今日は解散となった。

「契、魁念、まだ早いしどっか行くか？」

今日は陽射しが暖かいし、まだお昼も回っていない時間だ、遊びに行くにはちょうどいいだろう。

「うむ、私は大丈夫だぞ？」

「拙僧も大丈夫だな。相伴しよう」

二人から快諾を得られる。

「ハルはどうだ？」

みんなとも仲良くなったハルにも声をかけてみる。

「私もオッケーよ。国子と帰る予定だったけど、向こうも同じような状況みたい」

携帯をたたみながらそう答える。

ちなみに国子とは今朝会ったもう一人の方であるらしい。

「それじゃあ、行こっ！」

ハルが言うと同時に、俺たちは外へ向かった。

第三話　話せる俺と、クラスメイト（後書き）

ちなみに、この時代の文化レベルは、超能力者は現れたけれども、現代とはあまり変わりはないという設定です。

感想やアドバイス、お待ちしております。

第四話　話せる俺と、超能力

「やっぱ府中の人ってここらへんは詳しいの？」
「うむ、ハルよりは詳しいと思うぞ？」
「まぁ拙僧たちはみな、中羽市に住んでいるからな」

学園を出て、市街地へと向かう途中、ハルがそんな事を聞いてきた。

朝陽学園は中羽市に設立されており、俺たちの卒業した付属中も中羽市にある。
そのため、ハルを除いた三人は、この街についてはなかなか詳しい。

その他の中学は全て市外にあるため、菱名中のハルにとってはこの街は見知らぬ都市というわけだ。

「ふーん、じゃあここらの美味しいお店も知ってるんだ？」
「いや、俺らはハンバーガーぐらいしか食わなかったからなぁ」

まぁこの街に住んでいるからといって、食事情に詳しいわけではない。
中学生の財力では、せいぜいジャンクフードを食べるので精一杯なのだ。

「へぇー、チギリちゃんもそうだったの？」
「私は友達と普通の店にも行っていたぞ？」
「えっ！？　契友達いたの！？」

返事の代わりに右ストレートが返ってきた。
だから女の子なんだからグーはやめろと！
「黒治は失礼だな。私にだってちゃんと友達ぐらいいるぞ？」
耳をパタパタと動かしながらそう答える契。
意外だ、てっきり俺たち以外には友達がいないのかと思っていた。
「へぇ～、誰なんだ？」
「姉だ」
「それは友達とは言わないぞ……」
契の友達事情に思わず涙が溢れそうだ。
（ねぇ、何でチギリちゃん友達少ないの？　あんな可愛くて純粋でイイ子なのに）
ハルが耳元でそんな事を聞いてきた。
こんなことを聞けるなんて、相変わらず物怖じしないというか遠慮無い性格だなぁ。
まぁ別に隠すほどの理由でもないからいいけど。
（契はな、女子が苦手なんだよ）
（えっ？　何で？）
（契、狼人間だからさ、鼻が利きすぎるんだ。だから、化粧とか香水の匂いがな……）
（なるほどね……）

契の超能力である“人狼化”は、狼の良いとこだけを取った能力である。

精度の高い眼と耳と鼻、強靭な脚力や軽快なフットワーク、可愛らしい耳とふさふさの尻尾。このように、どれを見ても狼の良いところを取っている。特に最後の二つ。

しかし優れた能力のせいもあってか、慣れてない臭いや、騒がしい音に弱いという欠点も生み出してしまった。

なので、化粧や香水にうるさい今時の女子を、契は嫌いとまではいかないが、苦手なのである。

（そういえば契、ハルのこと嫌がらないな……）
（いや～、実は今日起きるの遅くてスッピンなんだよね～）

あははと照れたように笑うハル。

（でも、これでチギリちゃんが寄ってくるならこれからもこうしようかな？）
（その顔スッピンだったの！？）
（えっ、どこか変なトコあった？）
（いや！　むしろ他の子よりも……）

さほどそこまで言って、言い淀む。うーん、可愛いって素直に言うのは些か恥ずかしいな……。

（なになに？さほど他の子よりも可愛いとか～？）

しかし言い淀んだ俺を見てニヤニヤと聞いてくるハル。

その通りなのだけども、こういう反応をとられると、素直に認めるのはなんか癪だな……。

（んと、他の子よりもな）

（うんうん）

（肌のツヤがないなって）

女子のパンチに本気の恐怖を感じたのは初めてのことだった……。

◇◇

あの後、契が友達（姉）とよく行くという店で昼食を取るということになった。

契に先導され、着いたのは『ｆｌｅｕｒ　ｒｕｍｅｕｒ』という名のお洒落な喫茶店である。

「おや、契さん。いらっしゃい。今日はご学友と一緒ですかな？」

「うむ、席は空いているか？」

「もちろんですとも。みなさんもどうぞ」

出迎えてくれたマスターが、契と親しげに話し、みんなを席に誘導してくれた。

店の中は、コーヒーの良い香りやレトロな雰囲気によって、落ち着いた空間が醸し出されていた。

「へぇ～、良い雰囲気のお店ね」

「あぁ、なんか落ち着くな」
「うむ、私と友達の、数少ないお気に入りだ」
「確かに、先程から珈琲の良い香りもするし、向こうにいるお客さんも可愛いしな」

みんなが思い思いの感想を告げる。1人、若干見当違いなことを言ってた気もするが。

「チギリちゃん、何がオススメなの？」
「ここのオムライスは絶品だ、私はそれを頼む」
「いいね、オムライス！　私もそれにする！」

女子2名は早々と、契がうっとりとしたような声で勧めたオムライスに決めた。
まだこっちはメニューすら見てないってのに！

「2人は何にするつもりなの？」
「ふむ、拙僧はハンバーグランチにしてみるか」
「じゃあ、俺は日替わりランチで」

ハルが聞いてきたので、俺たちもパッパと決める。

マスターが毎朝市場に出かけ、その日の一番新鮮な食材を買ってきて決めるランチです。と謳い文句が書いてあったので期待できそうだ。

今日は何か聞こうと思ったが、出てきてからのお楽しみということで我慢した。

◇◇

しばらくすると料理が運ばれてきた。

契とハルの前には、デミグラスソースのかかったオムライス。

「うわっ！　凄く美味しそう！！」

「うむ、何度食べても飽きないぞ？」

いい香りのデミグラスソースと、ふわふわの卵がとても美味しそうだ。

魁念の前にはジューシーな肉汁を垂らしたハンバーグランチ。

「ほう、これは予想以上だな」

肉厚のハンバーグから出た、濃厚な肉汁が食欲を誘う。

そして俺の前には、

『誰かぁ！　水を！　水をくれぇ！！』（ビチビチビチッ）

『苦しいよぉ…パパ、ママどこにいるのぉ…？』（ビチビチビチッ）

『もう嫌だァ！　早く殺してくれェ！！』（ビチビチビチッ）

「本日は、新鮮な白魚やアジが揚がったとのことでしたので、白魚の踊り食いとアジフライでございます」

マスターの言うようにアジフライと“生きた”白魚がやってきた。

「あ、はは、美味そうだなぁ……」

白魚たちの阿鼻叫喚の声が食欲を彼方へと追いやる……。

「「……」」

魁念と契が気の毒そうな視線を送ってくる。

「？　二人とも、どうかしたの？」

「ハル殿、黒治の能力を思い出せば納得できるぞ……」

「……あぁ」

くそぅ……、よりによって踊り食いかよ……。

けどまだ大丈夫だ。白魚たちはお通夜みたいな雰囲気でだいぶ口数が少ない。これならまだ気にしないでいける、と思う……。

箸を手に持ち、トライしようとする。しかしそんな最中、一匹の青年、いや青白魚が声を高々にあげた。

『みんなぁ！　諦めるな！　まだ手はあるはずだ！』

『もう無理だよ！　救いなんてどこにもないんだっ！！』

『死ぬしか……ないのか……』

『幸子、ごめんな……。父ちゃん、ここまでだよ……』

『てめぇらバカ言ってんじゃねぇ！！　忘れたのか！？　俺達は誓ったろ！？　絶対負けないって……、生きて帰って来るって……、故郷の家族に誓っただろ！？』

『『『っ！？』』』

『俺はぜってぇ諦めねぇぞ……最期まで足掻いて足掻いて生き残ってやる！！　そして、帰ったら姫子に言うんだ、好きだって……』

『っっっ俺も！　俺も足掻いてみせる！！』

『俺だって！　生きて帰って母ちゃんに孝行するんだっ！！』

『俺もだ！　もう一度幸子の笑顔を見るまで、死んでたまるかっ！

！』

『『『『魚ぉぉぉぉおおお！！』』』』（ビチビチビチッ）

「食いづれぇよ！！！！」

何なんだよコイツら！？

海に還して姫子や幸子に合わしてやりたくなっちまうじゃねぇか！？　無駄に熱いんだよ！！

もうアジフライだけ食って帰りたい。けどそれだとマスターがっかりしちゃうんじゃないか？

しかしさすがにこれはなぁ……、でも家訓もあるしなぁ……。

「黒治、私のと交換するか……？」

「私のとでもいいよ、コクジ君……？」

あれこれと葛藤していたら、契とハルがオムライスを差し出してきた。

うぅ、凄い魅力的な提案だけど、

「……あー、大丈夫。２人とも凄く楽しみにしてたんだから俺のこと気にしないで食べな。それに“出されたものは全部食べる”ってのが家の家訓だからな……」

二人はオムライスが来る間、凄く楽しみそうにしていた。

それなのに、それを俺の都合で食べられなくなるってのは申し訳ない。

それに家訓ってのはホントだしな……。

「黒治がそう言うなら……」
「無理はしないでね……？」
「大丈夫、別に食えないわけじゃないし」

二人の優しさに決心がついた。意を決して食べるとするか……。
ちなみに魁念は、俺と交換させられまいと、早々と手をつけていた。

むかつくので後で一発しばいとこう。

『うわぁ！　人間が近づいてきたぞ！！』
『まだだ！　まだ諦めるな！！』
『あぁ、人間風情が！　かかって来ォい！！』
『幸子、待ってろよ！！』
『『『『魚ぉぉぉおおお！！』』』』（ビチビチビチッ）

……桜庭黒治、いざ参る！！

◇◇

「うっぷ……」
「黒治、頑張ったな」

白魚たちとの死闘を終え、ところ変わって近くの公園にやって来た。
思わず吐いてしまいそうになる背中を、契がさすってくれる。

あいつら魚なんだから痛覚無いはずなのに、

『ぎゃぁぁぁあ！！』
『痛ぇよぉ！　痛ぇよぉ！』
『嫌だァァァ！！　痛いィィィ！！』
『この苦しみ、必ず晴らすっ！！　グフッ！！』
とか叫びやがって、怖ぇよ……。
「あはは……、コクジ君の能力、最初聞いたときはいいなぁって思ったけどそうでもないね。思えば朝も鳥に追われてたし……」
ハルが苦笑いをしている。
俺も今回のようなケースは初めてだったよ。
「黒治の能力自体は平和的と言うか、メルヘンなんだけどなぁ」
「メルヘン言うな、エセ坊主が」
「拙僧は似非ではない。本物だ」
「俺も魁念みたいな何の役にもたたない能力だったらよかったのに……」
「役に立たないとは心外だ、省エネに貢献できる」
「あぁ、そのスケールの小ささが羨ましい……」
魁念の能力は“発光”。自分の体を光らせるだけという、コイツにピッタリのクソみたいな能力だ。
しかし今の俺にはそんな面白味もなんもない能力が羨ましい。
「お主、今頭の中で酷い罵倒をしなかったか……？」
「そう言えばハルの能力ってどんなだっけ？」
「おい黒治何故否定をしない」
ハルの出席番号は俺の一つ前だったため、自分の自己紹介を考え

るのに忙しくて聞いていなかった。
「ん？　見せてあげようか？　ちょうど外だしね」
ハルはそう言い、屈伸を始めた。なんだ？
「それっ！！」
そして、その場で勢いよくジャンプをする。
そのまま落下することなく、スカート姿で空中を優雅に闊歩するハル。
周りの一般市民が歓声をあげている。
空を歩けるのかぁ、いい……ん？　スカート姿で空を？
バッ！！
今の音は、俺と魁念が何気な～くハルの下を陣取った音である。
「てめっ、魁念！　邪魔だ！！　坊主なんだから禁欲しろ！！」
「何を言ってる黒治！　拙僧はただこの角度から太陽をみたいだけだ！！」
「いーや！　お前の眼は確実にハルのスカートの中を向いてるな！！ちなみに俺はもしもハルが落ちてしまったときを考え、安全のためここにいるだけさ！！」
「拙僧の方がガタイがいいからその役目は拙僧が果たそう！！」
「んだとコラァ！？」
「やんのかオラァ！？」
「黙りなさい変態ども」

空からハルが俺たちに向かって降ってきた。
ほらね、ちゃんと顔面で足裏の安全を確保したよ？
「まったく、今日はスパッツはいてるからお目当ての物は見れないよ？」
「「何だと！？」」
「じゃなきゃ空なんか飛ばないって……」
くそ！通りで陰しか見えないなと思ったんだ！
『私の時は、目を逸らしたくせに……』
契が呟いた言葉は聞こえなかったことにしよう。
「どう？　私の能力すごいでしょ？」
「空を歩ける超能力か……羨ましいな」
世間じゃ“スカイウォーカー”なんて呼ばれてる能力だ。
「私も能力見せたんだから、カイネン君も見せてくれてもいいんじゃない？」
折角だから、と言うハル。
「う、しかし拙僧の能力は……」
「パンツ見ようとしてたのに」
「ハァッ！！」
気合いと共に体を光らせる魁念。

まぁそれ以上は何もない。

『すげぇー！　クリ〇ンだ！』

『太陽拳使ってる！！』

公園にいた子供が騒ぎだす。

確かに魁念は坊主だし、光っているからそれは的確な表現だと思う。

「みんな、拙僧はあの子達と話があるから、先に帰っててくれ」

ダッシュで子供たちの所に行く魁念。

『うわぁ！　ク〇リンが来たぁ！』

『みんな逃げろ！』

『待てや糞餓鬼がぁ！！』

そして姿が見えなくなる魁念と子供たち。

「……どうするの？」

「放っとけ、いつもの事だから」

「うむ」

その後は、たいしてやりたいこともなく、解散ということになった。

第五話　話せる俺と、馬・猿・鳥

あの後、帰ってもやることが無いので、俺はコンビニで立ち読みをしていた。

陽が傾きかけたのに気付き、適当に食べ物を買ってコンビニを出る。すると、

『黒治！　やっと見つけた！！』

そんな声を、空からかけられた。

見上げると、十円ハゲが生々しい燕がいる。

その姿を確認し、俺はカモフラージュように携帯を取り出して、耳にあてる。

「だからな、人がいるところで話しかけるなと」

『それどころじゃないんだって、人が倒れてるんだ！』

そう告げる燕。

その真剣な声に、冗談ではないと言うことが感じ取れる。

「どこでだ？」

『椚山で！』

山と聞いて、血の気が引く。もしかしたら熊に襲われた、という可能性もある。

「重傷か？」

『大丈夫だ、二〜三メートル程の木から落ちただけらしいし、大きな外傷も見当たらない。ただちょっと頭を切ってるのと、意識がないのが……、息はしてるのは確認した』

燕が状況を細かく説明してくれる。

『だから黒治来てくれないか？　なかなか見つけにくいとこにいるし……』

「わかった、椚山だな？」

そんなことならもちろんオーケーだ。

しかし問題は椚山の位置である。

椚山は朝陽学園の東に位置し、今現在俺は正反対の西側にいる。

これじゃあ急いで行っても２０分はかかってしまう。

それまでに大変なことにならなきゃいいんだけど。

「けっこう時間がかかるけど大丈夫そうか？」

そんな心配をしている俺を見て、燕が、一般人にはわからないと思うが、ニヤリと笑って言う。

『大丈夫だ、足を用意している』

「足？」

『あぁ、カラスに用意してもらった。さっき雀姉妹が呼びに行ったから、もうそろそろここに来るはずだ』

「用意がいいな、助かる」

手際の良さに感嘆しつつ、足とやらが来るのを待つ。

……ん？コイツらが用意できる足って何だ？

『キャー！！』

『うお！？　何だ！？』

『何でこんなところに！？』

前方の曲がり角からそんな声が聞こえてくる。

なんだか嫌な予感……。

『黒治、待たせたな！』

カラスがやって来て、そんなことを言う。

一分も待ってないから大丈夫だ。

『『コクジ！　ナンかカッコウいいのがキたよ！』』

続いて雀姉妹。

か、格好いいのって……？

そんな俺の疑問は、目の前の角を曲がって現れた、二つの影によって解消されることとなった。

『ようクロ坊、待たせたな』

凛々しい顔をし、長いポニーテールが素敵な白馬（ニコニコ牧場在住のシラカバさん）と、

『Ｈｅｙコクジ！　手綱を握ってきてやったぜ！！』

手綱を握るニホンザル（同じくニコニコ牧場在住。何故かグラサン、キャップ、ラジカセ持ち）が現れたことによって。

携帯をしまい、腕を捲る。

さてと、

「よし、走って行くわっ！！」

『待ちなクロ坊』

シラカバさんに襟を噛まれる。

離せ！　一刻も争うかもしれない事態なんだ！！

『黒治、せっかく用意したんだ、乗ってってくれよ』

カラスがニヤニヤとそんなことを言う。

貴様！　わかって言ってるだろ！！

「あのね、街中を馬で闊歩したら警察呼ばれるからね！？」

街中を馬で駆け抜けるとか恥ずかしすぎる！！

鳥四羽と、白馬と猿に囲まれてる時点ですでに若干恥ずかしいけど。

『捕まらなきゃいい話だ！　ほらコクジ、そんなこと気にしてる時間はないぜ？　カモン！！』

ニホンザルが馬の背中を叩いて誘ってくる。蹴り落とされてしまえっ！！

「いや、でもっ！！　それだったらタクシー拾った方がっ！」
『クロ坊、俺には信号なんて関係ないぞ。スイスイ行ける』
「っほら！　馬の蹄って繊細じゃん！？　それでコンクリ走ったらっ！」
『シラカバさんはそんなヤワじゃねぇぜＹｅａｈ』
「じゃあ、」
『おい、何か呻きだしたぞ！！』

なんだかんだと反論していたが、椋鳥がそんな情報を持ってやってきた。

これはもう迷ってられないか。

「――っ！！　恥が何だ、外聞が何だ！！　今は人を助けるのが第一だろ！！」
『『ソウダソウダ！！』』

覚悟した、一時の恥なんざ気にしてられるか！

「早く着くんだろうな！？　シラカバさん！？」
『無論だ、俺を誰だと思ってやがる？』

シラカバさんの背中（何故か鞍と足踏がついている）に跨がりつつ問うと、自信満々に答えが返ってきた。

「燕、ルート案内しろ！」
『合点承知だ！！』

燕からも威勢の良い返事が返ってくる。

手綱を力強く握り、足に力をこめる。
馬なら何度も乗った！　行ける！！

「よし、飛ばすぞシラカバさん！！」
『任せな！　十分以内に着いてやるぞ！！』

力強く鳴くと、コンクリートを蹴り、集まっていた野次馬を割りながら凄い勢いで駆け始めた。
確かにこの速さなら、シラカバさんの言うように、十分と時間がかからないかもしれない。

「よし、カラスに雀姉妹、椋鳥は先に行っててくれ！」
『『『『了解（リョウカイ）！』』』』
「そして猿！　お前は何で来た！？」

最後に、後ろにいるはずの猿に聞く。
今思ったら猿は来なくてもよくなかったんじゃないか？

しかし猿は、力強い声で答えた。
『俺っちにも、まだコクジの役に立つことがあるんでね』
「……そうか、悪いな、頼む」

こんな真剣な猿の声は久しぶりに聞いた。
相当に大事な役割なんだな……。

『あぁ、だから俺っちのことは気にするな』（カチッ）
「待てお前、今何を押した？」
『ラジカセだぜ、ちょっと音楽でも聞こうかなと』

答えると同時に流れ出す聞き覚えのあるメロディ。

この曲は、うん、確か……『暴れん坊将軍』のテーマ、だったかな……？

「止めろぉぉぉぉ！！」

『何だ？　急に暴れん坊になるなよクロ坊』

「シラカバさんわかって言ってるよね！？」

白馬を走らせながら、暴れん坊将軍のテーマをかける男。イタい、イタ過ぎるよ……！！

止めようにもこの振動の中、後ろにいる猿を捕らえるのは難しい。こんなの人に見られたら！

『黒治、国道を走るぞ！！それの方が早い！！』

前方のそんな最中、燕からそんな素敵な提案が。

「その頭の恨みか？　だから人の多い国道を走るのか？」

『黒治さっき言ったろ？　恥も外聞も関係ないみたいなこと』

「うぐっ」

『さぁ行こうか晒しプレイにっ！！』

「やっぱ頭の恨み果たしてるだけだろ…」

『行くぜコクジＹｅａｈ！』

猿の掛け声とともに、俺たちは国道へと飛び出した……。

◇◇

本当に十分もしないうちに椚山の麓に着いた。
国道を走行中、写メられたり通報されたり警察に追われたりしたが、それは記憶の彼方に葬り去るとしよう。

「シラカバさん、ありがとう。早く着いて助かった。帰りは歩いて帰るから牧場に帰っていいよ」
『わかった。契嬢によろしく言っといてくれ』
「うん、気を付けて。雀姉妹、人に見つからないようナビゲートしてってくれ」
『『リョウカイ！！』』
『なーなーコクジ、俺っちには？』
「貴様は邪魔しかしなかったな、失せろ」
「了解！！」

シラカバさんとニホンザルは、雀姉妹のナビゲートと共に、牧場へと帰っていった。
途中見つからなきゃいいけど……。

『『あっ！　オイしそうなムシハッケン！』』
『こら、雀姉妹。ナビゲートするんじゃなか――』

『うぉ！？　馬がいる！』
『猿もいるぞ！？』
『通報した方がよくない？』

『――逃げるぞ！！』

訂正、途中捕まらなきゃいいけど。

「っと、あいつらはもういいや。怪我人はどこにいるんだ？」

『ここからちょっと登ったとこだ』
「わかった。走るぞ」
燕と二人（？）、山道を駆ける。
「そういえば、怪我人の状態とかあんま聞いてなかったな」
よくよく考えると、頭を切って、気を失っているという情報しか俺は知らない。
『そうだったな。怪我してるのはたぶん１２～１４歳の少女。理由は子猫を助けようとしてだな』
「子猫を？」
『源さん家のミケの子供だ。名前は清盛』
「いやそこは聞いてない」
そして源さん、なぜ頼朝や義経じゃなく清盛なんですか？
『清盛に聞いたところ、清盛がカミカゼたちに追いかけられて、木の上に登ったはいいが、降りれなくなったんだ』
カミカゼとは、ここらで暴れている野良犬のことである。
『そこに少女が現れて、カミカゼたちを追い払い、木に登って助けようとしたところで、枝が折れて一緒に落下したらしい。清盛は少女が守ってくれてたから無事だったんだけど、そのせいで少女は何の受け身もとれなかったんだって』
「なるほどね……」
『着いた、あそこだ！』

燕が言った方を見ると、様々な動物に囲まれている少女がいた。

『黒治、遅ぇじゃねぇか』←牡鹿
『黒治君、この子大丈夫かしら？』←牝鹿
『何か呻いてんだよねー』←蛙
「お前ら集まり過ぎだろ。どいたどいた」

近寄って覗きこんでみる。
短い髪の小さな少女が胸の前で手を組んで意識を失っている。その周りにはたくさんの花が。
まるで死んだ人のように見える。

「お前ら悪趣味なことするなよな……」
『最初にやろうと言ったのは清盛です』←猪
『否定はできないデス』←清盛（子猫）
「命の恩人にむかってっ！？」

まったく、非常識というか何というか。

「おい、大丈夫か？」

肩を揺すぶって声をかける。

頭の傷口も小さく、血も止まっている。血の跡が無いのは誰かが拭ってくれたのだろう。
問題は骨が折れたり脳内出血してないかなんだけど……、腫れた様子はどこにも見られないからおそらく大丈夫だと思う。

「おい！　大丈夫か！？」

今度は耳元で大声を出しながら、体を揺さぶる。
すると、目をうっすらと開けた。

「よかった！　大丈夫か？」
「ぉ……ぃた……」
「ん？」

何事かを呟く。何だ？

「おなか、すいた……」
「……」

少女はそう言い、また目を閉じた…。

第五話　話せる俺と、馬・猿・鳥（後書き）

●動物図鑑●

Ｎｏ．１　～雀姉妹～

鳥たちの中で、一番若い双子の姉妹。同じ時に産まれたから双子と言われている。基本漢字はカタコトで喋る。

まだ卵だった時に、巣ごと木から落ちてしまい、それを発見した黒治が孵化させ、飛べるようになるまで育ててもらったという過去がある。だからのことは、黒治はお父さん感覚で大好き。

第六話　話せる俺と、幼児体型（前書き）

第三話加筆修正しました。

確認しなくても問題ない程度なので気にしないでください。

第六話　話せる俺と、幼児体型

ちょうどコンビニで買った惣菜パンがあったため、それを与えると、少女は貪るように食べ始めた。
聞くと、朝から何も食べてなかったらしい。

そして食べ終わって気づく少女。

「ぷっはー！　ありがとなって何だこの状況は！？」

この状況とは、大小様々な動物五十匹程に囲まれている状況のことである。

「倒れてる人がいたから心配して集まってきたんだよ」
「何でこんなに集まってくるんだ……って猫！　猫は大丈夫なのか！？」
「ほらよ、無事だ」
『ありがとうございマス！』

右隣にいた清盛を指差す。それと同時に鳴く清盛。
無事な姿を見て、女の子はほっとしたように息をもらし、

「よかったぁ」

ふわりと、笑みをこぼした。

「――っ！」
「ん？　どうした？」
「いやっ、何でもない！」

先に言っておく、俺は世間一般でいうロリコンという社会的にマズい性癖は持っていない。
だけれども、その……さっきの笑顔を、不覚にも可愛い、と思ってしまった。

いやいやいや！　こんな少女にドキリとしちゃダメだろ！！　しっかりしろ俺！！

『なんだ黒治？　光源氏計画でもするつもりか？』←リス
『この子、今でこんな可愛いんだからな、将来とんでもないことになるぜ？』←モモンガ

とりあえずこの二匹にはデコピンをして黙らせておいた。

まぁリスたちの言うように、大きく勝ち気そうな瞳にあどけない表情と、色々ちっちゃいのを除けば、この子は契に匹敵するほどの美少女だ。……あれだよ？　これはアイドルとかを見るような感覚で、決してロリコン的な意味はないんだよ？

「何だ？　アタシの顔に何かついてるか？」

そんな事を考えていたら、俺は少女の顔をじっと見つめていたらしい。

危ない！　このままじゃ本職の方（ロリコン）と間違われてしまう！！

「えっと、木から落ちたらしいけど、骨とか大丈夫か？」
「あぁ！　怪我はなれてるから大丈夫だぜ！！　今回は打ち所が悪かっただけだな」

後頭部の辺りをさすりながら、ニカッと笑って答える少女。
こんな幼いのに怪我に慣れてるって……。
「答えづらいかもしれないけど、もしかして虐待とか……？」
「んぁ？　あぁ違う違う。アタシってやんちゃだからさ～、木から落ちたり熊と戦って怪我するなんて日常茶飯事なんだよ～」
なははと笑う少女。虐待じゃないのか、良かったぁ。
「って熊ぁ！？」
「ああ、熊だぜ？アタシ能力者だからな」
そう言い拳をグッと握る。小学生くらいなのに熊と戦えるって、相当な能力者じゃないのか？
「お嬢ちゃんやるなぁ」
「お嬢ちゃんって呼ぶな！　アタシはオトナだ」
不機嫌そうにこちらをジトーっと見つめてくる。
あれかな？　子供扱いされるのが嫌なお年頃とかなのかな？
「あぁ悪い、じゃあ名前教えてくれよ。俺は桜庭黒治だ」
「鬼灯胡桃（ホオズキクルミ）」
「胡桃ちゃんか」
「ちゃんづけするな！」
「あー、じゃあ胡桃で」
「おう！　アタシもお前のことを黒治って呼ぶぜ！」
鬼灯胡桃、なんかどっかで聞いたことある気がするな。

「黒治も能力者なのか？」

俺の制服の胸部分を指差しながら言う胡桃。

「ん？　どうして？」

「だってそれ、朝陽学園の校章だろ？」

「……あぁそうか」

確かに、朝陽学園の校章は目立つからなぁ、一回でも見たことがあるなら覚えていても不思議ではない。

「まぁな。今日入学式だったんだ」

「ん、なんだ黒治はアタシと同い年だったのか」

「……え？」

「アタシも今年から朝陽学園に入学するんだ」

「へー、胡桃は高校生なんだぁ……って」

『『「高校生だったの！？」』』

俺と動物たちが一斉に叫ぶ。

こんな低身長まな板ボディロリボイスなのに高校生だと！？

……ん？　どこかで聞いたことある名前だと思ったら、先生が朝、鬼灯さんが何だかんだとか言ってた気がする。

「な、なんだ！？　どっからどう見ても高校生だろ！？」

『そう言いながらナイムネを張る鬼灯胡桃ちゃん』←狸

「ふんっ！」

『ぶへぇ！？』

的確に悪口を言った狸を蹴り飛ばす胡桃。
言葉が伝わらないのに何故！？

「何かムカつくこと言われたような気がしたから蹴った。異論はあるか？」

周りの動物たちにガンたれる胡桃。
動物たちが一斉に目を逸らす。みんな何か言ったところで結果は見えているので、余計な事を言わないつもりらしい。

『幼児体型が』←カラス

1羽を除いて。

『カラス、さっきの見たろ！？　お前、死ぬ気か！？』
『燕、俺ぁかぁちゃんに誓ったんだ、自分に正直に生きる……って……』
『カラス首絞められてる絞められてる』

目にも止まらぬ速さでカラスを掴み、首を締め付ける胡桃。
だから言葉は伝わってないはずなのに何故！？

「おい、てめぇ今何か失礼なこと言わなかったか？」
『黒治！　俺、誠心誠意謝るから、この想い彼女に伝えてくれないかな！？』

助けを求めるカラス。
自業自得だと思うが、一応それぐらいならやってやらないこともない。

「あー、胡桃。俺の能力は“動物との会話”なんだ。それでそのカラスが謝りたいそうなんだが……」
「……聞いてやろうじゃねぇか」

胡桃の了承を得たので、カラスが言うことをそのまま口に出す。なになに、

「私カラスは、鬼灯胡桃様のようなナイスボディで大人の色香をふりまく女性を見たことがありません。私は先程思わず“ようえんだ”と呟いた訳で、決して悪口なんか言ったわけではありません」
「ほう……」

恐らく思ってもないだろう事を言うカラス。お前自分に正直に生きるってかぁちゃんに誓ったんじゃなかったのか。

しかしそんなカラスの説得のおかげか、胡桃の怒気が少し収まった気がする。
カラスはそんな様子を見て、安心したように言葉を続けた。

「黒治、こっから先は訳さなくていいけどさっきの『ようえん』は妖しく艶かしいって意味じゃなくて幼い園児って意味の『幼園』だから」
『ってうぉい！　声に出てるよふぐぁ！！』

また一つ、儚い命が散った。

◇◇

最中あの後カラス（生きてた）たちに解散をかけ、清盛（猫）を源さん家に送り届けてきた。

そして現在はその帰りの途中。時計を見ると、すでに七時を回っていた。

「なるほど、今日こっちに引っ越してきたから入学式にはいなかったのか」

「あぁ、まぁ入学式なんてたるいだけだからいいかってのもあったな」

「でも自己紹介とかしたぞ？」

「うぇ！？　普通次の日じゃねーのか！？」

二人とも帰る方向が一緒だったため、俺たちは談笑しながら帰っていた。

途中すれ違った人たちが『ロリコン？』『ロリコン』みたいな会話を繰り広げていたけど、決して俺のことではないと思う。

「そういえば何で山の中にいたんだ？　朝から何も食べてなかったみたいだし」

胡桃に予てからの疑問を問い掛ける。あんなところ、滅多に入り込まないと思うけど。

「修行してたんだ」

「へ？」

「だから修行！　能力をよりうまく使いこなせるようにな。飯は今日の朝、到着と同時に修行に行ったから何も食べてなくてだな…」

なるほどね、確かにあそこなら人も来ないから修行をするにはいい環境だと思う。

「どんな能力なんだ？」

「“肉体強化”だな」

これまた胡桃には似合わない能力だ。俺のメルヘンな能力と交換してあげたい。

「黒治はメルヘンチックな能力だよな」
「メルヘン言うな」
「なははは！」
「笑うなよ、俺だって胡桃みたいな能力がよかったんだぞ？」
「アタシの能力？　こんな能力がか？」

そう言い、一瞬で消える胡桃。

「はっ？」
「こっちだこっち」

後ろから声が聞こえる。
振り向くと、胡桃がニマニマと笑っていた。

「足を強化しての高速移動だ。まぁ確かに黒治のメルヘンな能力よりは役にたつなぁ～」

む、そう言われるとカチンとくる。

「はっ！　そんくらいの速さなら眼で追えないこともないさ」
「本当か～？」

また後ろから声が聞こえた。こいつ……できる……！！

「なはは！　黒治は反応遅いな！　さすがメルヘンだ！」

「言ってろ！　次は捉えてやるからな！！」
「なははは！」
笑いながらまたもや瞬時に消える胡桃。今度は挑発しているのか、中々に止まらない。
だが俺の動体視力をなめるなよ！　右後ろ右左前左右後ろ左後ろ前、ここだぁ！
「うわっ！？」
「危な！」
俺が出した手を避けようとしてバランスを崩し、勢いよく転びそうになる胡桃。
咄嗟に手を伸ばして腕を掴んだが、一緒に転げてしまった。
「いっつぅ」
「てて、黒治よく見抜いたな」
「まぁな、ってはっ！？」
「ん？」
目を開けたら胡桃が俺の上に覆い被さるように倒れているだと！？　何このラッキーイベント！？この体勢じゃあ胸とかあたって……、
「……」
「な、なんだよ？」
……女の子と抱き合うような体勢なのに、まったく柔らかいものが当たらない不思議！

「まな板か……」
「ふんっ！」
「ごふぁ！？」

腹に正拳突きを入れる胡桃。これ白魚食った直後だったら確実に吐いてたぞ。

「ずびばぜん」
「謝るくらいなら最初から言うな」
「ばい」

馬乗りになりながら、ふんっ！　と可愛らしく顔をそむける胡桃。

「胡桃さん」
「ん？」
「早く降りてもらえませんかね？」
「何でだ？」
「いやだって、」

ガサッ
『ロ、ロリコン……！』

こんな感じのことが起こるかもしれないからね、手遅れだけど。
声のした方を見ると、主婦のようなご婦人が、手にした買い物袋を落とし、驚愕に目を見張っているところだった。

「ロリコン……？」
「えっ！？　胡桃さん意味がわかんないんですか！？」
「な！？　し、知ってるに決まってんだろ！？」

慌てたように答える。コイツ実際意味わかってないな！？

胡桃に気をとられていると、ご婦人の方は何かを取り出した。

「えっと、こういう時は１１０番でいいのかしら……？」

「奥さん！！　ちょっと待って！　誤解を解く時間を頂戴！！　まず馬乗りになってる方が普通逆だと思うんだ！？」

「言われればそうね……、お嬢ちゃん、この人に何かされなかった？」

胡桃に問い掛けるご婦人。変な事は言わないでくれよ…！

「……ロリコンだった」

「予想しうる限り最悪の答えだよ！！」

「え、ロリコンって『ローリングしながら転んだ』を略した言葉じゃねぇのか？」

「何そのトンデモ解釈！？　わからないなら聞こうよ！？」

胡桃が『わ、わざとだ！　意味しってるし！』とか言ってるが無視無視。それよりご婦人に弁解しなければ！！

「奥さん！　これは誤解ですから時間を！」

「あ、警察ですか？」

「大人はいつだって待ってくれないっ！！」

その後、説得のかいあってかなんとかご婦人と警察（本当に来た）に納得してもらい、前科はつかなかった。

しかし不運な事に、説明中に雀姉妹などが近寄ってきたせいで、目撃情報などから昼の件がばれてしまい説教された。

しかも『はらへったから帰る』と言って胡桃が帰っていった。何と自由な行動をとるのだろう。

あいつめ、覚えとけよ……！！

第六話　話せる俺と、幼児体型（後書き）

●動物図鑑●

Ｎｏ．２　カラス

黒治をいじり、黒治にいじられる黒い鳥。
ボケやツッコミを入れないと気がすまないタイプである。

最初は『か』『ら』『す』はカタカナ表記で喋らせていたが、いつの間にかに忘れていた。

第七話　話せる俺と、チーム分け

「あ、ロリコン君」
「あれ、なんかデジャビュが……」

翌日学園に登校すると、ハルから社会的立場を失いそうな言葉をかけられた。この様子だと昨日の出来事が広まってるな…。

「黒治、お主幼子を押し倒したというのは本当か？　詳しく感想を聞かせてもらおう」
「黙れ煩悩丸出しエセ坊主、それは嘘だ」
「でもコクジ君、ボブ君の前の席に座ってるちっちゃい女の子が言ってたよ？」

ハルが楽しそうに指をさしながら言う。
その方向に目を向けると、低身長かつまな板な女の子、鬼灯胡桃が座っていた。
その周りにクラスメイトが集まっていて、中心で胡桃が何かを話している。

『黒治はロリコンなんだぜ』
『黒治君ってそんな人だったんだ……』
『初日にも春さん襲ってたとか聞いたよね』
『犯罪者予備軍だね……』
『？　何で犯罪者なんだ？』
『こんな何も知らない無垢な子に、あんな下劣な事を！！』

非常にマズい。
彼女はいったい何を喋ったのだろうか。

「なぁ魁念、俺って何したことになってるの？」
「胡桃殿を押し倒し、肉欲の限りを尽くしたことに」
うわーい、入学2日目にして最悪な評判がたってるぞー。
「そ、それは胡桃本人が言ったのか？」
「いや～、クルミちゃんは『ロリコンのはずの黒治はいるか？』って言っただけだよ？」
面白そうに話すハル。どうやら誰かが話を盛って広めたらしいな……。
てか胡桃さん、今回はロリコンをどういう意味で使ってるの！？
上手い具合になっちゃってるけど！？
「で、実際は何があったんだ？」
「あ、私も気になる。クルミちゃん昨日いなかったのに、何で知り合いなの？」
「別になんてことのない話だよ。昨日さ――」
魁念とハルに昨日起こった一連の出来事を話す。馬の部分は笑われるだけなので省略した。
「――というわけなんだ。だから胡桃は今回も、ロリコンを別の意味で使ってるだけなんだと思う」
「なるほどなぁ、お主らしいと言うか何と言うか……。まぁ早いところ弁解しといた方が良いと思うぞ？　さっきからあんな調子だし」
「だよな、じゃあちょっと説明してくるわ」
「あ、コクジ君。今は行かない方が、」

胡桃の方に行きかけた時にハルがそんなことを言ってきた。

「えっ？　何で？」

「くたばれロリコン！！」

「胡桃様に近づくな！！」

「ブタ箱に帰れ変質者！！」

「ってあれ？　動けないよ？　って痛ぁ！？　ちょ、何！？　この状態では止め、痛い痛い！！　何で急にっぶべらっ！？」

胡桃に近づこうとしたら、女子三人が俺の前に踊り出て、それぞれの超能力を俺に放ってきた。

一人目が俺を金縛りにし、二人目がペンや消しゴム等を浮かせ、俺にぶつけて視界を奪い、三人目が圧縮した空気をがら空きのボディにぶつけてきた。

ナイス連携プレー！って違ぁう！！

「急に何！？　俺なんかした！？」

「婦女暴行」

「それは誤解だっ！！」

女子3人がまるで親の仇のようにこちらを見てくる。

「なっ！？　大丈夫か黒治！？」

それとは対照的に、胡桃が驚いた様子で俺に近寄ってきた。胡桃さんマジ天使。

「胡桃様！？　そんな下劣な人間には近づかないでください！！」

1人が悲痛な叫びをあげる。

胡桃様って、君は昨日までは『花川中の箕島郷美です。超能力は金縛りです。好きなものは小さいおん……小さい物です』とか言っちゃう普通の女の子だったじゃないか！？

「黒治はイイ奴だ、倒れてたアタシを介抱してくれたからな」
「快抱（くいた）！？」

何か漢字が違う気がする。

「桜庭黒治め、胡桃様の心までを掌握して……」
「許すまじ……」
「万死に値する……」

女子3人が何やらブツブツと言い始めたが、耳を傾けない方がよさそうな気がする。
それよりも、

「胡桃、お前ロリコンってどういう意味か理解したのか…？」
「『論理的に考えて今度会う』。略してロリコンだろ？」

……あぁ、空が眩しいな……。

◇◇

「田沼魁念だ、よろしく頼む」
「相良春だよ、ハルって呼んでね」
「アタシは鬼灯胡桃だ、よろしくなっ！」

あの後、あの女子三人の近くに置いておくのは危ないと判断したため、こちらに呼んで魁念とハルを紹介した。

特に問題もなく、お互い自己紹介をすませ、軽い雑談をし始めたところで、

「ってあれ？　そういえば契はどうした？」

雑談の場に契がいないことに気づいた。そもそも今日はまだ契を見てすらいない。

「あー、チギリちゃんは……」

「あっちで拗ねておるな……」

ハルと魁念が苦笑いを浮かべながら教室の隅に目をやる。そちらの方を向くと、契が体育座りしていた。

な、何かあそこだけ暗く感じる……。

「黒治はロリコンだったのか……、だから私や、私のパンツに見向きもしないのか……」

「ち、契さん？　どうなさいました？」

何やらアブナイ事をボソボソと呟いている契に声をかける。

すると契はこちらを一瞥し、尻尾を一回ぱさりと振って呟いた。

「黒治か、私なんて何の魅力もないただの狼なんだな」

「はっ？　何言ってんだ？」

「いいんだ、慰めなんていらない……」

「いやまだ慰めてないけど……、契は普通に可愛いと思うぞ？」

「そうやって！　昨日みたいに私の心を弄んでっ！！」

「痛っ！？　だからグーは、グーはやめてって！！」

また何かを勘違いして怒ってるのか！？　誰かヘルプ！！

「クルミちゃん中学はどこだったの？」
「網走中條中だ。一昨日こっちに越してきたばかりだ」
「ほう、じゃあ胡桃殿は北海道から来たということか」
「おう！こっちはあったけぇな！！」
「へぇ～、あっちはやっぱり寒いんだぁ」
「お前ら助けようとしろよっ！？」
「「いや自業自得だろ（でしょ）……」」

二人声を揃えて言う。
何だ！？　俺の行いが悪いのか！？

「黒治の痴れ者がぁ！！」
「くそぅ、さばききれなっ！？　金縛り！？　箕島さんちょっと止めて！！　あっ！野々山さんも！？」

俺に対する集団暴行は先生が来るまで続いた。

◇◇

「えー、みなさん。明日から入学後の学力テストがあります。明日は国語、数学、英語。明後日は超能力の実技テストです。明日のテストは――」

契の誤解をといて、朝のホームルーム。
担任の柏田先生が明日からのテストの話をしていた。

超能力専門高校といっても、超能力ばかりを勉強しているわけではない。基本的な高校の授業は（授業数は少ないけれども）、俺達もこなさなければいけないのだ。

何故このような教育方針なのかというと、“一般教養もないような人間が超能力を上手く扱えるか”、という朝陽学園の創設者の言葉によるものらしい。まったくもってその通りだ。

ちなみに、普通の高校でいう美術、音楽、体育、保険などの授業がまるごと超能力のカリキュラムに当てられている。

「――です、気をつけて下さい。次は明後日の超能力の実技テストの説明ですね。このテストは――」

そして本命の超能力の実技テスト。これはその名の通り、超能力の実力を測るテストである。

能力の扱いを試験官に見せたり、学校が出す課題をクリアする、超能力を使った模擬戦などと、バラエティにとんだ試験だ。

そしてこの試験に共通して言えることは、

「――ですね。なので五人一組でグループを作ってください」

グループをつくり、試験を共に協力することだ。

これは超能力者の主な就職先が自衛隊などと、団体行動をする場が多い、という理由からしい。

まぁ他にもチーム戦にした方が生徒のやる気があがる、っていうのもあるらしいけど。

「黒治、もちろん組むよな？」

魁念が俺の席にやって来て誘いをかけてきた。

ぶっちゃけ、魁念の能力は役にほとんどたたないから違う人と組みたい。まぁそれでも中学からの腐れ縁なので承諾する。

「おう、あとは誰誘う？」
「まぁ契は拙僧たちのところに来るだろう」
「うむ、もちろんだ」

ちょうどこちらに来た契。これであと二人。
それなら、

「ハルはどうだ？」
「うん、オッケーだよっ」

前の席にいるハルを誘う。
するとすぐに快諾してくれた。よし、これであと一人だ。

「誰かいないかな……？」

教室を見渡す。んーっと、

「ククク、俺に近づくと闇に飲まれるぞ？」
「ミナサン！　ボクをサソってくださーい。ナンデも燃やしマスよ～？」

とりあえずあの二人だけは止めておこう、うん。
他には誰かいないのか……？

『胡桃様は私達と組むんです！！』
『何を言ってるのかな☆胡桃ちゃん、うぅん、妖精ちゃんは簾ちゃん達と組むべきなのっ！　にゃは♪』

『『『そうだそうだ！！』』』
『黙れキモオタがっ！！』
『アタシはどこでもいいんだけどなぁ』

探していると、なにやら箕島さん達と上遠野さん達が胡桃を間に挟んで言い争いをしていた。会話から察するに、どちらが胡桃と組むか揉めているらしい。

『だいたいそっちは妖精ちゃんを誘っても四人でしょ？』
『もう一人誰かを探せばいいだけです！！　だいたい上遠野さんは何で胡桃様を欲してるのですか！？』
『えっ？　魔法少女には妖精は付き物でしょ？　にゃは？』
『この人……真性だ……！！』
『うあー、早く決めてくれよー。って、ん？』

そんな中、ふと胡桃と目があった。何か嫌な予感がする。

『あ～、アタシ黒治と組むんだった』
「死ねロリコンがっ！！」
「うぉ！？　危なっ！？」

嫌な予感的中！！
胡桃の発言と同時に、三人娘の一人の天野奈々さんが、空気を圧縮した弾丸を俺目掛けて放ってきた。
避けたことによって、後ろにいた魁念に当たったが気にしない。

『落ち着きなさい奈々、私達にとって胡桃様の意見は絶対』
『しかし！！』
『あなたの言いたい事はわかります。しかし、まだ時ではありません……』

『はい……』

その時がきたら何をされるのだろう、非常に怖い。

「黒治は色々と大変だな。まぁともかくよろしくなっ！」

そしていつの間にかに俺の近くに寄ってきて、なははと笑う胡桃。
コイツは自分が原因で俺が攻撃されてるって気づいていないんじゃないだろうか。

「よろしく頼むぞ、胡桃」
「よろしくねっクルミちゃん」
「共に頑張ろうではないか胡桃殿」

契、ハル、魁念の三人がそれぞれ胡桃を歓迎する。

『うーん、妖精ちゃんが決めたなら簾ちゃんは文句言わないよ、にゃは♪』
『『『さすが簾ちゃん！！』』』

上遠野さんも諦めてくれたらしい。よかったぁ、無事グループができて。

『実技テストの時に……』
『なるほど、では……』
『そうですね、血の雨を降らせてやる……』

あ、はは。……本当に、これでよかったのかな？

第七話　話せる俺と、チーム分け（後書き）

●動物図鑑

Ｎｏ．３　ツバメ

黒治をいじり、黒治にいじられる最近はげた小さい鳥。
基本ふざけてばっかりだが、根本には熱いハートがある。

カラス同様に最初は『つ』『ば』『め』をカタカナ表記で喋らせていたが、いつの間にかに忘れていた。

第八話　話せる俺と、試験開始！

実力テスト二日目。
今日は超能力の実技テストの日である。
一日目の学力テストを割愛したのは、別に出来が悪かったからとかじゃナイヨ？

「どんな内容なんだろうね？」
「体操服で校庭集合ということは」
「運動系の何かだよな？」

前で同じグループの女子3人、ハル、契、胡桃が雑談をしている。
3人が言うように、現在俺たち一年生は体操服に着替え、校庭に集合していた。
超能力の実技テストは、その当日まで何が試験になるかは知らされない。
“想定外の出来事を対処してこそ超能力者、想定内の出来事は誰でも対処できる”という言葉を、またもやここの創設者が残したからであるらしい。
だから今回のテスト内容については、俺たちはまったく知らされていないままに校庭に集合となっている。

「まぁだいたい毎年似たようなものだがな」
「想像つくよなぁ」

知らされていないとは言ったものの、毎年初めてのテストは比較的容易なものばかりであると聞く。
例えば、朝陽学園をコの字型に囲っている山を使っての宝探しや、レースなどがもっとも主流である。

「アタシは模擬戦闘の方がよかったけどなぁー」
「私は探し物の方が得意だぞ？　鼻が効くからな」
「私は山登りだと、一番に着く自信があるよ」

胡桃たちがそんな事を言う。うわぁ、俺たちよりも断然役にたつなぁ……。

「拙僧は夜道の安全を守る、とかいうテストだったら有利なんだけどな」

そんなテストは絶対にあり得ないと思う。というかお前ができるのは辺りを明るくするだけだろ？　暴漢とかには対処できないじゃん……。

「そういえばそこの坊さんは光るだけの能力なんだよな？」

胡桃がクルリと振り向き、そんな残酷な事を言う。

「だけとはなんだ、だけとは」
「だけではないか？」
「契、そう言ってやるな。魁念は自分にはまだ隠された能力があるって信じてるんだから」
「そうだったのか……、すまないな魁念」
「拙僧はちゃんと現実と向き合っているからな！？　それに光るって事は凄い役立つんだぞ！？」
「例えば何に役立つのさ、カイネン君」
「除霊の時にとかにだな――」
「除霊（笑）ですかー」
「すごいですねー、除霊（笑）」

「お主らは……！！」
『あー、てめぇら静かにしろ、しなかったら焼き殺す』
魁念をからかっていたら、そんな不穏な声が前方から聞こえてきた。
見ると、校庭の壇上にボサボサ頭の男が立っており、拡声器を使ってこちらに注意をしていた。
いけないいけない、からかうのに夢中で先生が来ているのに気がつかなかった。
『ったく、静かにしとけよ？』
ボサボサ頭の男はそう言い、自然な動作で右手に作った火球をこちらに放ってきた。
弧を描きながら、正確に俺たちのところに飛んでくる火球。その周辺がゆらゆらと陽炎のように歪んで見えるため、威力は相当なものだと思われる。
「「えええぇぇぇぇぇぇ！？」」
状況を脳がやっと理解して、俺と魁念が咄嗟に左右に飛び退く。
その直後、俺たちのいたところにソフトボール程の火球が降り立った。周りの生徒全員が頭を下げる。しかし予想に反して、火球はなんの反応もしめさなかった。
「な、何しやがる！？」
「殺す気か！？」
『はは、冗談に決まってるだろう。生徒めがけて超能力を放つわけ――』

ドォォォォン！！！！

火球が火柱をあげながら、半径一メートル程を燃やしつくした。
火球から約一メートル半のところにいた俺や魁念を熱気が掠める。
うわー、熱気だけで火傷しそー。

『……』
「……」
「……」
『……まぁ計算通りだな』
「「嘘つけぇ！？」」

避けてなかったら今頃俺たちはあの世行きの威力だったぞ！？
しかし気にした様子もなく、ボサボサ頭はヘラヘラと笑いながら弁明をしてきた。

『いやいやマジだって。俺、お前たちなら安全圏に避けるってよんでたもん』
「ふざけるなよ！？　あと五十センチ近かったらお陀仏だったぞ！？」
『近くなかったからいいじゃねぇか』
「つかさっき冗談だとか言ってたよな！？」
『冗談で爆発させてみるぞーってことだよ。ったく、何が不満なんだよ』
「「不満なとこは大量にあるけど強いて言えばお前の態度かな！？」」

反省した様子も見せず、あっはっはっと笑うボサボサ頭。くぅ、今すぐそのボサボサ頭を切り落としてやりたい！！

『あっはっはっ、ってあれ？』

そんな俺の願いが通じたのか、ボサボサ頭の頭がポロリと落ちた。もうなんの比喩表現でもなく、本当にポロリと。

ガンッ！！

『痛っ！？』

「……」

「……」

一瞬の静寂。

『あっはっはっ、参ったね。ミキちゃ～ん？』

「「「うわぁぁぁぁぁぁぁ！？」」」

直後の大混乱。

無理もない、いきなり目の前で人の頭が落ち、しかもその頭が普通に喋ったのだから。ちなみに断面図はばっちし見える。

しかし、その大混乱は一瞬で収まる。

『何だ！？　何であんな恐ろしい光景を見たのに僕はこんなにも冷静なんだ！？』

『私も……、むしろ今の状況が面白いと思えるくらい』

『あ、それ俺も』

口々に冷静な自分に困惑する生徒たち。どうやらここにいる生徒全員が同じような心境に陥ってる（？）らしい。かくいう俺もそうだ。

『まったく田母神先生、生徒たちを慌てさせるような事をして』
『それは甘粕先パ、先生も同じですよ……』
『心外ですね、棚瀬先生。私はこうした方が手っ取り早く田母神先生が黙ると思っただけです』
『だからっていきなり首を落とすのは……』

俺たちの困惑をよそに、壇上に若い男女がどこか気の抜ける会話をしながら現れた。あの落ち着きようから見て、どうやらこの状況をつくったのはあの二人らしい。
つか田母神に甘粕に棚瀬？どっかで聞いたことあるような……。
『もしかしてあの人たちって七年前の浜風学院占拠事件の時の……』
『だよな！？　たった三人の生徒が解決したっていう！！』

近くの生徒が興奮気味に話しているのを聞いてあぁそうかと思い出す。

浜風学院占拠事件。
これは七年前、とある宗教団体の教徒五十名程が起こした、超能力専門高校の浜風学院を占拠した事件である。
その宗教の総本山は関連性を否定、捕まった教徒も関係はないと口を開かず、次の日には全員が舌を噛みきって自殺していたという詳しい動機は一切不明の事件だ。おそらく優秀な超能力者の洗脳を目的としたものであると、世間では考えられている。
まぁそこはいいとして、この事件を解決したのが、なんと当時そこの生徒であった田母神理一（タモガミ リイチ）、甘粕美紀（アマカス ミキ）、棚瀬修（タナセ シュウ）のたった三名だったのである。
棚瀬修が精神操作で犯人たちを油断させ、甘粕美紀が相手の頭や手、足を体から外して行動力を奪う、そして田母神理一は圧倒的な火力で敵を制圧。という華麗な手順で、警察が到着する前に片を付

けてしまったのだ。
この事件のせいであの3人は、世間じゃ“精神安定剤”、“泥棒姫”、“焼夷弾”なんてダサい名前で呼ばれてる。

『へぇ～、あの先生たちってそんな有名人なんだ』
『お前知らないとか珍しいな』
『つかショーイダン？　って何だ？』
『アハーハ～、焼夷弾はデスね～、人馬を焼殺し、市街、ジャングル、兵器などを焼き払うために焼夷剤を弾体に詰めた弾。今日では、焼夷剤の種類によってテルミット系、黄リン系、油脂系に大別されている。ナパーム弾は油脂焼夷弾の代表的なものである。最も有名な初期の焼夷弾は『ギリシアの炎』と呼ばれたもので――』
『うお！？　お前は急に出てきて何だ！？　何でそんなに焼夷弾の話は流暢に喋れるんだ！？』
『ナニをいってるんですか～？　ボクはニホンゴうまく喋れマセンヨ？　マァ話を続けマス、『ギリシアの炎』は678年にビザンチンの技師、カリニコスによって発明された――』
『誰か助けてくれー！』

……まぁそんな訳であの三人は有名なのだ。
それにしてもあの三人が、なぜこの学園にいるのだろう……？

◇◇

『いや～、騒がせて悪かったな。俺は田母神理一。今年から朝陽学園に赴任してきた。ついでに今回のテストの試験監督』
『同じく甘粕美紀です』
『棚瀬修です、よろしくお願いしますね』

混乱が収まったところで、ようやく今回の試験内容についての話

が始まった。

『まずはこれを見てくれ』

田母神先生がそう言いながらポケットからピンポン玉ほどの大きさの球を取り出した。

『俺たち教師陣はこんな感じのゴム球を朝陽学園を囲む山に５００個置いてきた』

手のひらのゴム球を転がしながら言葉を続ける。

この感じだと最初の実力テストは、無難に宝探しになりそうだ。

『想像がついている奴がほとんどだと思うが、お前たちにはこれを一人一個。つまり一チーム五個持ってきて欲しい』

やっぱりな。という声が周りからちらほらと聞こえてきたが、田母神先生はそんな様子を見て、ニヤリと笑いながら『しかし』と付け加えた。

『しかしそんなただの宝探しじゃつまらないと俺は思う。なので細工を施したり、ルールを加えたりした。よく聞いとけよ』

田母神先生が言った主な特徴はこうだ。

・ゴム球によって得点が違う。ちなみに球の得点はゴールするまでわからない。
・何個かのゴム球にはギミックが仕掛けられている。
・取ったゴム球は変えてはいけない。
・すでに取られているゴム球をめぐっての奪い合いは禁ずる。

・各チームに上級生が一人監視役としてつく。この上級生を競技に参加させることはできない。

『まぁざっとこんなものだな。集めてきた球の合計点が今回のテストの点数になる。何か質問はあるか？　ある場合はここからそこにいるシュウが全て答える』

『えっ！？　ちょっ！！』

田母神先生が飽きたのか、棚瀬先生に全てを投げ渡した。

慌てる棚瀬先生をよそに、本人は煙草を吸い始めた。

「何を基準に取ったって決めるんですか！？」

どこからか生徒が質問をし始めた。

『えっとですね……！』

『5秒以上持ち続けた場合です。証人は同伴する上級生ですね』

そしてあたふたとする棚瀬先生の代わりに甘粕先生が答え始める。

「ギミックってどんなのですか！？」

『それは田母神先生が用意したものでわかりませんが、まだ学園に入りたてということで、危険なモノはないと思『ヤッベ、そう言われてみればそうか』すいません危険なモノあります。気をつけて下さい』

え、えぇー……。

「やっぱり取るの難しいとこにあるゴム球って高得点なんですか！？」

『これも田母神先生が用意したものでわかりませんが、テストですのでやはりそうだ『そうか、確かにそうだな……』すいません、ランダムだそうです』
『まぁ今のはさすがに冗談だ、ギミックがついてるやつは高得点にしといた記憶がある』
『今のはって、その一つ前のは……？』
『シュウ、俺はゆとり教育っていけないと思うんだ』
『みなさん気をつけて！！　この人ギミックに関してはマジみたいだから！！』
『さぁ、制限時間は今から三時間後、十二時半までだ！！　試験開始！！』

こうして色々と不安が残る中、試験が始まった……。

第八話　話せる俺と、試験開始！（後書き）

●動物図鑑

Ｎｏ．４　シラカバさん（馬）

ニコニコ牧場在住の白馬のオス。
普段は大人しく、ニコニコ牧場のマスコットとして人気を博している。

しかし実際は荒ぶる魂を持っており、人（？）情に熱い。
本人曰く、１９Ｃアメリカの西部で名を馳せていたカウボーイの生まれ変わりであるらしい。

第九話　話せる俺と、実力テスト？

「よっしゃあ燃えてきた！！　早く行こうぜっ！！」
「まぁ待つんだ胡桃殿」
「んぁ？　何でだよロリコン？」
「やめてっ！！　拙僧にもそれを持ち込まないで！？」
「でも黒治がロリコンの意味を教えてくれたぞ？　そして魁念はロリコンだって」
「黒治テメェ！！　胡桃殿に何て教えやがった！？」
「幼女を追いかけ回す人って」
「くそぅ、それでは否定できないではないか……！！」
「いや否定しようよカイネン君！？」

アホな会話はさておいて、試験開始の声と同時に次々とスタートを切る他の生徒たち。しかし俺たちのチームはスタートを切ろうにも切れずにいた。

「んで、結局アタシたちは何で出発しないんだ？」
「出発しないっていうよりもできないんだよ。監視役の上級生が俺たちのチームにはまだ来てないからさ……」
「うむ、そもそも他の班にはいつの間に来たのだ？」

なぜなら、監視役で来るはずの上級生が俺たちのチームだけ見当たらないのだ。彼らがいないとゴム球を確かに取った、という証明をしてくれる人がいなくなる。これではたとえ五個集めたとしても採点してはもらえないだろう。

「黒治、どうするのだ？」

契が小首をかしげながら聞いてくる。あらやだ可愛い。

「んー、こんだけ人が多いから見失ってるだけかもしれないよな……。少し待ってみるか？」

「うむ、黒治がそう言うならそれが良いのだろう」

「しょうがねぇなぁ」

というわけでしばらく待ってみることにした。

そうだ、この間に作戦なんかを話し合っておいたら効率がよいのではないだろ「んがー！！　何でアタシたちの班には来ないんだよ！？　もう我慢できねぇ！！」うかって早ぇよ！？　セリフ一つ言い終わる前にこの子痺れ切らしちゃったよ！？

「クルミちゃん、落ち着いて」

「落ち着いていられるか！！　アタシは約束守れない奴と勝負に負ける事が大嫌いなんだよ！！」

「見事に二つとも当てはまっているな……」

「あとアタシよりも背の高い奴」

「それはこの学園の全員が当てはぶはぁ！？」

事実を言っただけなのに殴られた！？

「おうガキども、どうした？」

騒ぎを聞き付けたのか、田母神先生がこちらにやって来る。ちょうどいい、監視役の事を聞こう。

「田母神先生、監視役の人が来ないんですけど」

「あぁ、一班分確保できなかったのす～っかり忘れてたわ！あっはっはっはっ！！」

どうしよう、殴りたい。

「それで、拙僧たちはどうすればいいんだ？」

「あー、そうだな。おい、シュウ！！　ちょっとこっち来い！！」

遠くで甘粕先生と話していた棚瀬先生を呼ぶ田母神先生。あぁ、もうだいたい予想がついたわ……。

何も知らない棚瀬先生が従順に寄ってくる。

「何ですか、田母神先生？」

「お前コイツらの監視役な」

「えっ？どういうことですか？」

「あとよろしく～」

「えっ？いや……」

棚瀬先生が混乱しているうちに、田母神先生は校舎内へと逃げ込んでいった。

「……すいません、どういうことでしょうか？」

事情説明中。

「なるほど、そういうことですか。それなら大丈夫です、引き受けますよ」

監視役の上級生が来ていない、そもそも足りない。という事情を説明したところ、快く引き受けてくれた棚瀬先生。どっかの教師とは大違いだ。

「棚瀬教諭、採点は二人だけで大丈夫なのか？」

契がそんな事を聞く。たしかに、一クラス八チーム、それが八クラス分もあるのだ。それを二人だけで採点するのは大変な労力がかかるんじゃないだろうか？

しかし棚瀬先生は笑って答えた。

「ゴム球の採点方法を知っているのは田母神先生だけですし、採点には甘粕先生の能力しか必要ないみたいですからね。僕は特にやることがなかったんですよ」

「ふむ、なるほどな。……そういえば先生方の能力はいったいなんなんだ？」

先程の騒乱を思い出したのか、今度は魁念がそんな疑問を口に出す。

それに対し棚瀬先生は再び笑い、柔らかく答える。

「教えてあげるのは別に構わないのですが、今は試験の最中なのでまた今度にでも。あと先程から言おうと思ってたのですが、彼女が……」

苦笑いを浮かべている棚瀬先生の視線を追うと、ハルと胡桃の姿があった。なんだ、さっきから胡桃がおとなしいと思っていたらハルがなだめていてくれたのか。

意識をそちらに向けると、二人の会話が容易に聞こえてきた。何を話しているんだろうか……？

「本当かっ！？　女は待てば待つほど大人になるのか！？」

「そうなんだよクルミちゃん！　私のおっぱい、なんでこんなに大きいかわかる？」

「――！？　ま、まさか……！！」
「そう……、私は待てる女だから！！」
「そ、そうだったのかっ！！　待てばそんな悩ましいボディになれるのか！？アタシみたいなまな板でもなれるのかっ！？」
「クルミちゃん、私も１０年前はまな板だったんだよ……」
「なん……だと……！？」
「ちなみに男も待てば待つほどおっぱい成長します」
「バカな！？」

「彼女がどんどん嘘の情報を教え込まれてしまいますから」
「「ハルストップ！！」」

棚瀬先生のおかげで胡桃の被害が最小限に抑えられた。ハルと胡桃、これは危険な組み合わせだな……。

◇◇

「よしっ！出発だぜ！！」

胡桃の威勢の良い声と共に裏山に入る俺たち。
しかし、しばらく歩いてもゴム球はおろか、他のチームの姿も見えなかった。

「くそ、やはり出遅れたか？」
「いや、遅れたと言っても五分程度だろ？それなのにゴム球だけじゃなく他のチームがいないってのはおかしくないか？」

いくら木々が視界を遮っているからといって人の気配や声が聞こえないのは不自然だ。誰もこのルートからは入っていない？　いや、それでも今この山には三百人以上いるのだ、いくら広いといっても

それはおかしい。
そんな疑問を考えていたら、鼻をスンスン鳴らしていた契が口を開いた。
「黒治、人がいた臭いはするぞ？」
「人がいた臭い？　じゃあもうここは荒らされたってことなのか？」
「さすがにそれは早すぎるんじゃないのかな？」
「うむ、臭いが強いからついさっきまでいたのだろう。恐らく誰かの超能り、」
契が言葉をとめ、山の奥を見つめる。まるで、獲物が接近してきたのを感じとる狼のように。
「来るぞっ！！」
そう言い、構える契。
来る？　これはゴム球集めの安全なテストだろ？　契は何を言ってるんだか。
何をバカなことを。と言おうとしたところで、木々を避けるようにして何かが接近してくることに気づく俺。な、なんだあれは！？
「うぉー！！　戦いか！？　戦っていいのか！？」
「何あれキモチ悪い……」
「ぶにぶにしてるな、中に人もいるな……。お、あの子スカートめくれてないか！？」
三者三様の反応を示す胡桃たち。俺たちの視線の先には、ぶにぶにした二メートル大のアメーバ（？）がうごめいていた。ちなみに徐々に接近中。
中には何人かの生徒たちが諦めたかの様にうなだれていた。もし

かしてみんなあれに捕まってたのか！？

「棚瀬先生。あれ何なんですか！？」

「たぶん田母神先生が言ってたギミックじゃないかと……」

「ギミック！？　あれゴム球じゃなくないですか！？　ゼリー状ですよゼリー状！！」

「ほら、ゼリー層の中にサクランボよろしく赤いゴム球があるじゃないですか」

「あ、本当だ……」

よくよくゼリー球を見ると中に小さな赤い球、つまりゴム球があるのが確認できる。

つまりあのゼリーモンスターがギミックということか……。

「つまりあれを取れば高得点ってことになるんだよね？　タナセ先生？」

「えぇ、田母神先生の話だとそうですね」

「でも見た感じあれには迂闊に近寄らな『うぉぉぉ！！　喰らえぇぇぇ！！』って行っちゃったァ！？　胡桃さん行っちゃったよ！？」

高く跳躍し、拳を振り上げながらゼリーモンスターに猪突する胡桃さん。しかも素手だし！？

ゼリーモンスターの少し前に降り立ち、拳に力を込めて、中の人なんかお構い無しに正拳突きを繰り出す胡桃。風切り音がここまで聞こえてくる！！　もしかしたらこれは……！！

ドプンッ！！（腕がゼリー層に吸い込まれる）

ウニョウニョ（ゼリー層から触手が伸びて、胡桃に絡み付く）

ズズズ（そしてそのままゼリー層の中に捕らえられる胡桃さん）

「……」
『……』
「……」
『……ふっ、やるじゃねぇか』
「「バカヤロゥゥゥゥ！！」」

俺と魁念が思わず叫ぶ。いきなり戦力失っちゃったよ！？

「むぅ、止めようと思ったのだが……」
「止める間もなく突っ込んでっちゃったね、クルミちゃん……」

契とハルも呆れたような、何とも言えない表情で胡桃を見ていた。
俺たちの呆れ様も気にせずに、捕らえられた胡桃は中で暴れている。

『うぉー！！　出せぇ！！』
『うわっ！？　ちょっと暴れないでよお嬢ちゃん！？』
『私は高校生だ！！』
『お嬢ちゃんってのは比喩表現だよ……。あのね、今自分も体験したでしょ？　このゼリー、物理攻撃効かないみたいなの』
『んぐっ、じゃあサイコキネシスとかパイロキネシスはいないのか！？』
『試したけど相当な念力か火力じゃないとウンともスンともいわないよ……』

ゼリーモンスターが二十メートルぐらいの距離に接近していたため、中の会話が聞こえてきた。なるほどね、相当な念力か火力か……。

「……俺たちのチームには、両方ともいないじゃないか！！」

そもそもうちのチームは近距離とアシスト系しかいなくないか？
こうなったらとる行動は一つしかない。

「胡桃」
『んぁ？　何だよ？』

ゼリーモンスターの中からのんきな返事が返ってくる。
そんな胡桃に俺は悲しげな視線を送る。胡桃も俺の意図に気づいたのか、ハッとした顔になる。

「胡桃、今思えば短い付き合いだったよな……」
『黒治、まさか……！？』
「さらばだっ！！」
『黒治テメェェェ！！』

ルールには全員でゴールしなきゃいけないという事はなかったはずだ。一人一個とは確かに言ったが、一人一人が一個ずつ持てとは言っていない。合計五個持ってくれば、例え四人だろうと採点してくれるのだろう。

「ですよね棚瀬先生！？」
「まぁ確かに全員でゴール、とはあの人言ってませんでしたね……」

ゼリーモンスターの中にいる人数も八人と、数が五の倍数でないために他のチームも同じような行動をとったと思われる。だからこのエリアにはまったく人がいなかったのか。

「コクジ君ちょっと待って！」
「ハル、あのモンスターは俺たちじゃ倒せない。これが一番の選択

なんだよ」
「いや、そうじゃなくて……」
ハルがゼリーモンスターの方に視線を移す。まだ何かあるのか？
『黒治ぃ……』
うっ！？　胡桃がチワワみたいにウルウルとこちらを見つめている！？　これじゃあ良心の呵責が……。
『黒治ぃ、ぜってぇ後で殺す……！！』
「みんな、一刻も早く違うゴム球を探しに行こう！！」
万が一ゼリー層が破れた時のために早く距離をとらなければ！！
それでもハルや契は動かない。何だ！？　まだ何かあるのか！？
再びゼリーモンスターに目を向ける。すると、
『きゃあ！？　何この変態！？』
『違うぞ！！　これは不可抗力だ！！　決して拙僧は捕まればあの中で女子とくんずほぐれつできると思ったからではないからな！！』
『何この人！？　願望がだだ漏れなんですけど！？』
変態も捕まっていた。
いや、あれこそ捨て置く対象だろ……。
「あいつはいいよ……」
「コクジ君、さっきからゼリー球を見てるでしょ？」
「うむ、私たちはその向こうを見ているのだ」
「その向こう？」

言われた通りにゼリーモンスターの向こう側に視線を送る。しかし男女のチームがいた、という事を確認した瞬間、目の前のゼリーモンスターが大火に飲まれた。

「んなっ！？」

ほとばしる業火に思わず顔を背けてしまう。そんな最中、向こう側から聞いたことのある、カタコト混じりの日本語と、芝居がかった声が聞こえてきた。

『アハ～ハー！！ボクにかかれば燃やすことなんてカンタンデスヨ～』

『ふん、【地獄の業火】か。中にいる一般人を護る俺の事も考えてくれよな……』

この声、ボブ・スティールと大貫太郎か！？

『ボブさん、もうよろしいわ』

続いて女性の声。その声に従って火の勢いが徐々に弱まっていく。中から現れたのは白い膜と浮かび上がったゴム球。

大貫太郎が指を鳴らすと白い膜は弾け、中から無傷の九人が出てきて、ゴム球は弧を描いて大貫太郎の元へ飛んでいった。

『どうですか桜庭黒治！私たちの方が胡桃様に相応しいでしょう！！』

その大貫太郎の隣にいた女性が俺に向かって声を荒げる。確かあいつは……。

「箕島さん！？」

胡桃を何故だか崇拝している女子三人、箕島郷美、野々山佳奈子、天野奈々さんたちがいた。それに厨二病な大貫太郎と危険なネグロイド、ボブ・スティールを加えてチームを組んでいるらしい。余り者たちが組んだのか……。

『私たちはこのテストであなた方よりも優れていると証明してみせます！！そうすれば胡桃様は私たちを認めて下さる！！見てなさいこのロリコン！！』

最後に俺を罵倒して踵を返す箕島さんたち。どうやら暴力で俺を排除して胡桃を囲うのではなく、胡桃自身に認めてもらう方針にしたらしい。

今のは大貫太郎とボブの力だろっ！　とツッコミを入れたかったが、後が怖いのでよしておこう。

「むぅ、高得点だったと思うのだが……」

「取られちゃったね」

契とハルが残念そうに呟く。

確かにあのゴム球はかなりの得点になるだろう。

別に胡桃を独占したいとかそういう訳ではないけど、何となくあのチームに負けるのは気分が良くない。こりゃ力入れて取り組まないとな。

「あれは俺たちの能力じゃ無理だったからしょうがねぇよ。俺たちが出来る事をやって、あいつらに負けないように頑張る。それが今の俺たちに出来る事だろ？」

「そうだよなっ！　良いこと言ったぜ黒治！」
「おっ？　胡桃もそう思うか？」
「おうっ！もちろんだぜ！！」

いつの間にかに隣に来ていた胡桃が俺の意見に同調してくれた。

「よし、じゃあ急ごう！」
「おうっ！だけどその前にちょっといいか黒治……？」

ゆらりと胡桃の背後に幽鬼が立ち込めたような気がした。あ、ヤバい。殺す言われたの忘れてた。
胡桃が拳を低く構える。こ、これはあのゼリーモンスターに喰らわせた正拳突きでは！？
契やハルに視線を送るが、二人はしょうがないよ、と視線を返すだけ。魁念は魁念で先程セクハラしていた女子から折檻をくらっている。それでも嬉しそうなアイツは本当に坊さんなのだろうか？

さて、ならば自分の言葉で胡桃を説得しないとな。

「……胡桃、俺はお前が自力で出れ」
「嘘つくなっ！！」
「ると信じてたんだってもう俺の話聞く気なかったんですね……」

説得失敗。覚悟を決めた俺は胡桃の重い一撃に素直に受け止め、そのまま意識を失った……。

第九話　話せる俺と、実力テスト？（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
ご質問したいことがありますので、できれば僕の活動報告を読んでください。

第十話　話せる俺と、実力テスト？

目が覚めてから二時間後。
山を根気よく探し回った結果、普通のゴム球三つとギミックが仕掛けられていたゴム球一つをなんとかゲットすることができた。
そのギミックのせいでパンチラ（魁念の）やポロリ（魁念の）という非常に誰得な状況になったが、説明するのも酷なので省略しようと思う。いや、省略させて下さい！
……まぁそんな紆余曲折あって、現在俺たちは一つの洞穴の前に立っていた。

「……どうする？」
「拙僧は止めた方がいいと思うが」
「でもここら辺にはもうないんだよ？」

この洞穴に入るか入らないか、今はそんな相談をしている。
もしこの中にゴム球があったら万々歳。ゴム球がない、もしくわすでに誰かに取られている、という状態だったら、俺たちは残り少ない時間を無駄に過ごしてしまうことになる。
しかしここら一体には、あからさまな所に置いてあるゴム球を除いたらゴム球がないのは事実。先程この山に住む鳥を総動員して探させたのでこの情報は確かだ。

「契、何か臭いやら気配やらは感じるか？」
「むぅ、入口付近では特に感じはしないが……」
「感じはしないが？」
「……頭を撫でて褒めてくれたら続きを言う」
「まて、褒めるのはいい、だけど撫でるのは……」
「……」

「……」
「……」

くっ！　撫でるしかないのか！！

「……契はいい娘だなぁ」
「はふぅ……」

ふわふわした髪の毛を撫でると、契は犬のように眼を細めながら息をもらす。僕の純情ハートが大変なことになっています。
それと周りの視線がすんごい痛いです！！　突き刺さるような視線とはこの事か！！

「も、もういいだろ。何を見つけたんだ？」
「むぅ、足跡だ」
「足跡？」

物足りなそうな契の視線を追うと、確かに僅かだが靴の模様のような跡が見える。しかも複数。

「あっちゃー、これはもうあったとしても取られてるね。それとごちそうさまです」
「そのようだな、違うところを探すか。それとごちそうさまだ」
「んだよ、また探すのかよ～。アタシは戦いがしたいんだけどなぁ。よくわからないけどアタシもごちそうさまだっ！」

口々にそんな事を言うハルたち。そして胡桃さんは意味もわからず言うのはいい加減どうかと思いますよ？

「お前ら覚えとけよ……」

「僕もごちそうさまです」
「棚瀬先生まで！？」
「皆さん、ちょっと時間をくれませんか？　おかしな事を感じたので」
「あれ、スルーですか？」

ここにはないと見切りをつけて、俺をいじりつつ違うゴム球を探しに行こうとしたが、棚瀬先生の発言にみんな揃って足をとめた。

「棚瀬教諭、何がおかしいのだ？」

契がクエスチョンマークを浮かべながら棚瀬先生に問う。契の狼的な感覚でも何らおかしなところはなかったのだろう。それなのにおかしいと呟いた棚瀬先生を不思議に思ったのかもしれない。

「あぁ葛原さん、僕の能力を先程説明しましたよね？」
「“精神操作”系の超能力ですよね、何か感じとったんですか？」

ハルが口をはさむ。
先程、鳥たちが付近のゴム球を探しに行った時の待ち時間に、棚瀬先生の超能力について詳しく聞かせてもらったのだ。
彼の能力、“精神経路”（メンタルリンク）は“精神操作”系の能力の中でも中々に珍しいものだ。
“精神経路”の主な特徴は二つ。一つは、有効範囲内にいる人間の精神状態を自分と同じものにする、という特徴である。
もし近くに怒っている人がいたとしても、冷静な棚瀬先生が能力を行使すると、その人は冷静に。笑っている棚瀬先生が能力を行使すると、その人もなんだか可笑しな気分になってしまうのだ。
今回の試験前の混乱も、この能力を行使して納めたらしい。
そしてもう一つの特徴は、有効範囲内にいる人間の精神状態を感

じとる、という特長。
今回はその能力で洞穴の中の異変を感じ取ったらしい。

「中の人が何だか焦った心境になっていますね……」
「試験の制限時間が迫ってるから、とかじゃないですか？」
「そうだといいんですけど……。それともう一つ気がかりな事があって、恐らくこの人たちは洞穴に入ってから長時間経過している可能性がある、という事です」
「んぁ？　何でそんなことがわかるんだ？」
「葛原さんが残り香を嗅げない程の時間が経っているんですよ？」
「確かに……」

言われて気づく。契はたとえ一時間経っていようが、残り香を感じとる事ができる。なのに契は足跡しか気づけなかった、つまりこの洞穴に、中の人たちは少なくとも一時間以上捕らわれているということになる。
ということは……、

「この中に、まだ取られてないギミック付きのゴム球がある可能性大ってことだなっ！？」
「落ち着いて下さい」

胡桃が目を輝かせて言うが、棚瀬先生はそんな胡桃を自身の能力を使って落ち着かせる。

「なんかめんどくさくなってきたなぁ……、やる気でねぇ……」
「って棚瀬先生！？　もしかしてさっきからそんな精神状態だったんですか！？」
「いやいや、そんな訳ないじゃないですか」

ははは、と手をひらひらさせながら否定する棚瀬先生。あ、怪しい……。

「このギミックは危険な気がしますね、何せ一時間以上も生徒が拘束されてるんですから」

「つまり棚瀬殿は何が言いたいんだ？」

「ここに救援を呼びます。皆さんがこの洞穴に入ることは私が許しません」

「「何だと！？」」

俺と魁念が叫ぶ。せっかく高得点になりそうなゴム球の痕跡を見つけたってのに！？

「タナセ先生、危険だと判断したらすぐに戻るっていう条件でも無理ですか？」

「認められませんね。上級生も付き添いで付いて行ってるはずなのに戻って来れない。これだけ考えれば危険だと判断できるでしょう。それに洞穴の中に入ってしまえば携帯も圏外になるため、外との連絡手段がつかなくなります」

「うっ……」

もっともな事を言われて引き下がるハル。

くそっ！！　高得点のゴム球があるかもしれないのに諦めきれるか！！

「魁念！」

「もちろんだ！　棚瀬殿」

「何ですか田沼君」

棚瀬先生は話すときに相手の顔をちゃんと見て話すタイプの人間

だ。そんな棚瀬先生が、魁念と話しをするため、反射的に魁念の顔を真正面から見てしまう。

「ハァ！！」
「なっ！？」

気合いと共にビカァと光る魁念の瞳。魁念はこのテスト中、一回も見せ場がなかった。というか能力を使っていない。よって魁念の能力を知らなかった棚瀬先生は容易に引っ掛かってしまったのだ。

「今だ行くぞ！！」
「おう！」

俺と魁念が洞穴の中へと走り出す。ハッハァ！　今のうちに中に侵入して雨垂れの数でも数えてようかな……。

「俺たち、先生にあんな事して……、何やってんだろ」
「黒治は何もしとらん、悪いのは全部拙僧だ……」

何故だかテンションがどんどん下がっているような気がする……、気のせいか……。

「まったくあなたたちは……、油断も隙もありませんね、僕と同調してもらいましたよ」
（棚瀬先生っていつもあんな精神状態なんだね……）
（うむ、凄いと言うべきか、哀れむべきか……）

棚瀬先生やハルと契がそんな事を言っている。どうやら俺たちは棚瀬先生に能力を使われたらしい。けどそんなのどうでもいいよ……、ガムの包み紙になりたい……。。

「さて皆さん、ここから離れまんぎっ！？」

棚瀬先生が変な声をあげたと思った瞬間、ブルーな気持ちが晴れやかな気持ちに一瞬で様変わりした。そしてその場に崩れ落ちる棚瀬先生。

「気ぃ失わせちまえば能力は発動されないだろ？」

棚瀬先生の後ろに、手刀を構えてニッと笑う胡桃が立っていた。さてはあいつ、先生に手をあげたな！？

「「グッジョブ！」」

「おうっ！」

お互いにグッと親指をたてる。今回の試験で初めて胡桃と心が通ったのではないだろうか？

そんな俺たちを見て、ハルは深いため息をついて言葉を発する。

「あーあ、どうするの？」

「もちろん入るに決まってんだろ？　目指せ高得点！！」

「ちがくて、タナセ先生」

「あぁ、先生は魁念がおぶってく」

「えっ！？　拙僧が！？」

さて、あとは懸念すべき点はもうない。中に入っていくのみだ。

「よし、入る事に異存はないな！？」

「おうっ！」「うむ！」「ま、面白そうだしいいか」「ちょ、棚瀬殿意外に重っ」

みんなから威勢の良い声が帰ってくる。よし、入るぞ！！

第十話　話せる俺と、実力テスト？（後書き）

●動物図鑑

No．５　猿

シラカバさんと同様にニコニコ牧場在住。牧場なのになぜ猿がいるのかは本人でも謎らしい。

自称東京生まれヒップホップ育ちらしいが、その片鱗を一度も見せたことがない。ただ帽子とラジカセはいつも持ち歩いている。

実は二児のパパ。

第十一話　話せる俺と、実力テスト？

「「なんじゃこりゃあああ！？」」

入って数分、すぐに開けた場所に出たと思ったら、そこには謎の大きな機械が鎮座していた。一応絶叫しといたけど、恐らくこれがギミックなのだろう。

機械には五つの台座と大きなスクリーン、その間に丸いステージがついており、台座の上にはボタンのような物も設置されていた。まぁ分かりやすく説明すると、何て言うか……。

「うむ、クイズ会場か？」

「だよな、これ」

そう、全体的にクイズ会場のような作りなのだ。台座は早押しクイズの解答者席で、スクリーンにはきっと問題が出るのだろう。間にあるステージはいまいち謎だが。

「んだよ、結局戦いじゃねーのかよ……」

クイズ会場と聞いて、胡桃が目に見えてしょんぼりとする。そんなに戦いたいのならお前は陸軍学校にでも入ればよかったろと突っ込んでやりたい。

「これはどうすれば――」

『おい、声が聞こえる！　人が来たぞ！』

『マジか！？　おーい、あんたたち！！　聞こえるかー！？』

疑問を遮るようにして、唐突に自分たちの足元から声が聞こえて

くる。これは俺たちの前に入った生徒の声かな？

「おーい、何で地下？　まぁそんなとこにいるんだー！？」
『俺たちここのギミックにボッシュートされちまったんだよ！！』
「ボッシュート！？　どういうことなんだ！？」
『あー、誰か台座のボタンを押せ！　そうすればスクリーンに説明が出るはずだから！！』

契に目で合図してボタンを押してもらう。
すると、しばらく電子音が続いたと思ったら、軽快な音楽とともに画面が点灯した。そして文字が浮かび上がり、アナウンスが聞こえてくる。

『ようこそいらっしゃいました。まず監視員は中央のステージにお越し下さい』
「……まぁとりあえず魁念頼むわ」
「了解した」

魁念が棚瀬先生をおぶりながら中央のステージまで行くと、スクリーンに新しい文字が浮かび上がった。

『ひとまず監視員の人とはお別れです』
「「はっ？」」

その文字が表示されるやいなや中央ステージに穴が出現し、その中に棚瀬先生は飲み込まれてしまった。
魁念ごと。

『何故だぁぁぁぁぁ――』

フェードアウトしていく魁念の声。数秒後、着水らしき音と一緒に魁念の声はかき消えた。

『がぼぉあ！？　な、何ですかこれは！？』
『先輩が来たぞ！　って棚瀬先生！？』
『しかも何故か二人いるよ！？』
『このハゲはゼリーのとこで願望垂れ流しにしてた……！！』
『おぉ、確かしましまパン――』
『キャァァァ！！』（バチン）
『『ヴァァァァァ！！！！！』』
『日向（ヒナタ）のバカ！！　棚瀬先生も感電してるじゃない！！』
『も、もっと！！』
『な、何なんだこの坊主！？　今のを喰らって喜んでやがるぞ！？』

……何やらカオスな事になっているが、棚瀬先生と魁念は下の階にいる生徒たちと同じ部屋に落とされたらしい。

「え、えぇ！？　これどうするの！？　カイネン君も落ちちゃったよ！？」
「違う面にも堕ちてたけどな……」

しかし慌てる俺たちをまったく気にせず（機械だから当たり前だが）、ヘンテコな効果音をつけながらこのギミックの説明が始まる。内容は簡単に要約するとこういう事だ。

・今から合計十問出題される。
・わかった人は手元のボタンを押し、答えを言う。
・正解だったら次の問題へ、間違っていたら答えた人はボッシュート（地下に落とされる）。
・三十秒以内に答えられなくても、ランダムに誰か一人ボッシュー

ト。
・パスは二回まで。
・十問終わった時点で挑戦者が一人でも残っていたら挑戦者の勝利、ゴム球を進呈。ボッシュートされた者も全員解放される。

という感じだ。
他にも挑戦者が全員ボッシュートされた場合、この試験が終了と同時に地下から解放される。問題中、地下とは連絡できないようになる。等の細かいルールがあったがあまり気にすることでもないと思う。
それより問題なのは、

（すでに一人ボッシュートされちまってるってことだよ！！）

この機械、魁念もいることを関知せずにボッシュートしやがって！！　確かに監視員を気絶させた俺たちも悪いけれども！！　てかそもそも監視員をボッシュートする必要性なくないか！？

『それでは問題を開始します。挑戦者はスタンバイしてください』

台座の足元に、足をはめるような機材が現れた。あれか！？　ボッシュートするときに逃げられないようにするためか！？

「ど、どうするのコクジ君！？」
「いや俺に聞くなよ！？　契どうする！？　魁念と先生見捨てて安全牌のゴム球取りに行く！？」
「むぅ、私に聞かれても。そう言えば胡桃はどうしたのだ？」

言われて気づく。そういえば先程から一言も発していないな。でもさっき見た感じではやる気なかったから大じょ――

「おっしゃあ燃えてきた！！　勝負だな！？」

――う夫じゃなかった……。

「胡桃さん何やっちゃってんの！？　あぁ足枷までつけて！！」
「これって勝敗が決まるんだろ？　それに逃げちまったら男が廃るってもんだ！！」
「お前男じゃないからな！？」
「誰が男だ！！」
「理不尽っ！？」

何で今殴られたの俺！？

「あははっ、コクジ君。こりゃ覚悟決めて十問全部解くしかないよ」
「うむ、間違えなければ良い話だからな」

ハルと契も足枷をつけて、台座のボタンに手をおく。確かに、契の言う通り間違えなければいい話。よくよく考えればけっこういけるんじゃないか？

「そうだよな、よし！　勝負してみっか！！」
「おうっ！　その調子だぜ！！」

俺も足枷をつけて台座のボタンを押す。
数秒後、挑戦者が一人足りないがそれでもいいのか、と確認のメッセージが出てきたので再びボタンを押す。どうせ魁念はいてもいなくても勉強面では力にならないから関係ないさ！

『かしこまりました。それではこれより問題を始めます』

「よっしゃあこい！！」
『第一問、日本の十三宗に数えられる仏教を三つ答えなさい』
「魁念んんんん！！！！！」

一問目から魁念向きの問題が出るとは！！　この機械わかってやってるんじゃないのか！？

「えぇ！？　どうするの！？　下とはもう連絡取れないよ！？」
「落ち着け！　日蓮宗とか浄土宗とかメジャーなの言えば――」
ピンポーン

ハルと対策を話し合ってると、誰かがボタンを押した軽快な音が聞こえた。
振り向くと胡桃がしたり顔でボタンを押している。まさかわかったのか！？

「胡桃！？　お前わかったのか！？」
「へっ、任せときなっ！」
『解答をどうぞ』
「キリストきょ――」
『ボッシュートです』

胡桃が奈落の底へと消えていった。

「……」
「……」
「……」
『ボッシュートが行われたため、問題を変更します』
「いやいやいや！　あいつは何を言ってるの！？　仏教を答えなさいって言ったじゃん！？」

「むぅ、私は無理な気がしてきたぞ」
「奇遇だねチギリちゃん、私もだよ……」

一問目にして既に三人。あのレベルの問題を一人最低三問とかなきゃいけないのか！！

『第一問、コンゴ共和国の首都を答えなさい』

コンゴの首都！？　そんなものわかるわけ、って確か……。

ピンポーン
「ブラザビル？」
『正解です』
「コクジ君すごっ！！」
「考えてみたら知り合いにコンゴ出身の渡り鳥がいたわ」
「コンゴから渡ってきたの！？」

取り敢えずわかる問題でよかった。この調子であと九問か、キツいな……。

『第二問、これは何と読みますか？　“木乃伊”』
ピンポーン
「ミイラだ」
『正解です』
「黒治、褒めてくれ」
「あー、契は頭いいなー」
「むぅ、おざなりだ……」
『第三問、バルザックの書いた作品を一つあげなさい』
ピンポーン
「『ゴリオ爺さん』ね」

『正解です』
「ハルもやるなぁ」
「読んだことあったからね」
『第四問です――』

最初こそ躓くと思ったが、俺も含めてみんなが予想外に問題を答えることができた。
そして気づいたらパスを一回残して八問目、残っているのは三人。
これはひょっとするんじゃないか？

『第八問、度胸があって、敵を敵と思わないようすを四字熟語で表すとなんと言うか』
ピンポーン
「大胆不敵だ」
『正解です』
「ナイスだ契。いやぁ、最初はどうなるかと思ったけどなぁ」
「そうだね、なんとかなりそうだね」
「うむ！」

ハルも契も自然と顔が綻んでいた。これで何とか高得点のゴム球を取れるかな？

『第九問、マレーシアの世界遺産を一つ答えなさい』
ピンポーン
「キナバル国立公園！」
『正解です』
「うわ、よくわかったね」
「マレーシア生まれの熊が知り合いにいてさ」
「コクジ君の能力、やっぱ役立つよね……」

よし、これで後一問！　これは勝ったも同然だろ！！

『最終問題です』
「何でも来いよ！」
『相良春さんに質問です』
「「「……はい？」」」

◇◇

不覚ながら、拙僧は競技に参加する前にこの地下空間に落とされてしまった。
拙僧がいなければクイズなんて無理に近いと思っていたが、残った三人はなんとか最終問題までたどり着いたらしい。よかったよかった。
ちなみにこちらの声は向こうに届かないが、向こうの声はこちらにバリバリ届いている。

「いやぁ、これならゴム球を獲得できそうだな」
「おうっ！　アタシが落ちたかいがあったもんだ！」

胡桃殿の意味のわからない発言はおいといて、拙僧たちは晴れやかな笑顔をしていた。しかしそれとは裏腹に、棚瀬殿と向島（ムカイジマ）日向殿のチームは苦笑いを浮かべていた。

「これは……、“精神操作”系の方が作られたギミックですね」
「ん？　棚瀬殿、それはどういう意味だ？」
「今にわかりますよ」

苦笑しつつ、上を指差す棚瀬殿。ちなみに胡桃殿の手刀によって、ここに入るときの記憶が都合良く消えていたのでうまい具合に誤魔

化す事ができた。
『最終問題です。相良春さん』
「「なっ！？」」
拙僧と胡桃が驚きの声をあげる。今この機械、ハル殿を名指ししなかったか！？
「やはりそうですか。向島さん」
「何ですか？」
「最終問題、あなた方の知られたくない過去や秘密、もしくは答えづらい問題を出題されませんでしたか？」
「ええ……、その通りですね」
「やはりですか……、この機械は“脳視”の能力が備わっていますね」
脳視、“精神操作”系の一部として分類されている能力で、簡単に言えばこの能力は相手の記憶を見ることができる。
「先程から都合良く聞いた事や、読んだ本などが問題に出されていますからもしやと思ったんですがね」
言われて気づく不自然さ。
黒治は決して頭は良くないはずだ、けれども先程からなかなかの難問をいくつか答えている。しかも知っていた答えはどれも都合良く教えてもらったことばかり。
ハル殿もちょうど読んだ本が問題に出されていた。契は元々頭がいいからどうだかわからないが。
「ってことは……」

「黒治たちの秘密などが暴露されるってことだよな？」
「はい、そういうことになりますね」
「私たちも最終問題で全滅して……」

答えなくたくない事を聞かれる。つまりそれはみんなの前で秘密を暴露するか、ゴム球を諦めてボッシュートされるの二択しか選択できないということになる。

「……拙僧たち、早めに落ちて正解だったな」
「あぁ……」

上にいる三人に同情をおぼえつつ、拙僧たちは安堵の息をもらした。

第十二話　話せる俺と、実力テスト？

「えっ！？　何で急に名指しなの！？　しかも私だし！」

今までの出題形式とまるっきり変わり、急に名指ししてきた機械に驚きの声をあげるハル。まぁとりあえず、

「頑張れハル！」
「うむ、ハルがラストを飾れるぞ」
「二人とももうちょっと疑問に思おうよっ！！」

慌てた様子でツッコミを入れてくる。確かに疑問には思うけれども、慌てるほど衝撃的だとは思わない。
むしろさっきのゼリーモンスターのギミックに比べたら、いささかこのギミックは簡単過ぎるんじゃないかと思っていたぐらいだ。

「名前はその機械が生徒の登録データをあさったとかじゃないのか？」
「そうかなぁ……」

珍しく、といっても知り合ってまだ数日だが、ハルが若干怯えた様子をみせる。
そんなに警戒するものかなぁ？　せいぜい某バラエティーの友達パークでやっていた、自分の趣味に関するクイズぐらいの事しか聞かれないんじゃないかと思う。

「そうだって、何をそんな怖がってるんだよ？」
「そう、だよね。うん、じゃあ私ラスト飾っちゃうよー！」
「ひゅーひゅー！！　その調子だー！！」

しかし、俺の予想をはるかに越えた問題が、無機質な声と共にハルに出題された。

『好きな【ピーーー】と、その理由は何ですか？』

「……えっ？」

『好きな【ピーーー】と、その理由は何ですか？』

危ない危ない、放送規制。

ご丁寧に二回アナウンスされる問題。問題というよりも質問。いや、質問というよりもセクハラだろう。ハルだけでなく契も顔を真っ赤にしている。えぇい、契はこっちをチラチラ見てくるな！！

「いや、あの……、えっ！？」

完璧に狼狽しているハル。『襲われる』などと平然と言えるハルからは想像もつかない姿だ。

しょうがないなぁ、俺は答えられないけどエールぐらいは送ってやろう。

「ハル、俺は気にしないからいっちまえ！！　さぁ！！」（グッ！）

「なにその爽やかな笑顔と親指！？　コクジ君が気にしなくても私が気にするのっ！！　うぅ、好きな……なんて……、け、経験したこともないのに……」

ぶつぶつと呟くハル。なるほど、経験したことないのか。

ちなみにさっきの質問は好きなタイプは何ですか？　なんて平凡な質問ではない。十八禁もののセクハラ質問だ。俺らはまだ一年生なのに！！

『残り十五秒です』

ハルがしどろもどろしている間に、三十秒が経とうとしている。マズイ！！

「ハル、もう何でもいいから答えちまえ！！」
「えぇ！？　だってっ」
「どうせ適当言ったってこの機械わかんねぇだろ！！」
「そうかもだけどっ！　何を言えばいいのか……」
「【ピーーー】でいいから！！　理由は安心するから！！」
「たっ――！？　うぅ……、わかったよぉ」
ピンポーン

俺の言った【ピーーー】に更に顔を赤くしながらボタンを押すハル。
な、何だかもっといじめたくなるような、上気した表情をしている。無駄にドキドキしちゃってるよ俺！！

「むぅ……」

契の不満そうな顔と声には気づかないフリをしておこう。

「た、【ピーーー】で、理由は安心するからです……」
『ボッシュートです』

音もなく奈落へと落ちていくハル。

「……」
「……」
『ボッシュートが行われたため、問題を変更します』

なるほど、ハルの好きな【ピーーー】は【ピーーー】じゃないのか……。ためになったなぁ……。

「どうするのだ黒治！？」
「俺はもう満足です」
「そういうことじゃ――」
『葛原契さん』
「！？」

次の獲物は契に決まったらしい。
泣きそうな顔をしてこちらに眼を向けてくるが、俺には何もできないため顔を背ける。

『【ピーーー】はいつですか？』

無慈悲なセクハラ問題がまたもや出題された。ほほぅ、【ピーー】がいつなのかを聞くのか。これはまた……、良いこ、えげつない事を聞いてくるな。
さて、契は何て答えるのかな？　別にわくわくなんかしてないですよ？

「パスで」

透き通るような声で告げる契。ほうほう、パスときましたか……。

「貴様ァアアア！！」
「何故そこまで怒るのだ！？　逆の立場を考えてみろ！？」
「逆の立場なんて存在しない！　大切なのは今！　僕たちはこの現実を大切に生きるべきだと思います！！」

「むぅ、何だか私が悪いような……。いや、でもあんなふしだらな質問の答えを黒治以外に聞かれるなんて……」
「えぇそっち！？　俺だったらいいのかよ！？」

衝撃発言はともかく、確かに今ここで契が答えたら、下にいる連中にも契の【ピーーー】を聞かれてしまうことになる。それはなんだかいい気がしないな……。まぁそれならパス使ってよかったのかな？

「あー、もう言っちゃったもんは仕方がないか」
「うむ」

コクりと頷く契。まぁパスしたところで再びこの機械にセクハラ質問されるだけのような気がするのは黙っておこう。
さて、次はどんな質問がくるのかな？　いや本当にわくわくなんてしてないですよ？

『パスが使われたので、問題を変更します』
「うむ」
『あなたが昨日見た夢は何ですか？』

難易度と俺のテンションが一気にガクンと下がった。何だよ昨日見た夢は何ですかって……、これなら契も楽に答えられるだろう。くそぅ……。
まぁ契がどんな夢を見たのかは気になるな。と思い、契の方を向くと、

「〜〜〜っ！！」
「……何で顔真っ赤になってるんですか？」

見事にゆでダコ状態の契がいた。さっきのセクハラ質問よりも顔真っ赤になってないか！？

「契？」

「ち、違うぞ！？　決してふしだらな夢を見たわけじゃないぞ！？」

「ふしだらな夢？」

「っ！？　謀ったな！？」

「契さん僕何も言ってません」

勝手に自滅してうなだれる契。

まったくもう、夢の内容なんかまったく気にしてな『ピンポーン』

『覚えていない』『ボッシュートです』くもないのに！！　一言も言わずに奈落の底に落ちていきやがって！！

「契さァん！　今のは夢の話なんだから少し我慢すれば良かっただけなのに！！　答えてくれれば、」

『桜庭黒治さん』

「俺に被害はこなかったのに！！」

もちろん絶叫しても返事は返ってこない、しかし叫ばずにはいられなかった。人間ってそういうところあるよね？

『問題です。あなたの――』

これはもう覚悟を決めるしかないか……。どうせあのくらいの質問だったら男の俺にはあまり苦ではないだろう、恥ずかしいけど。

そんな感じに覚悟を決めた俺に、機械はこんな質問をしてきた。

『――身に、小学三年生のとき何がありましたか？』

「――えっ？」

思考が止まる。
小学三年生、今からだいたい7年前。
何があった？　それは――

◇◇

「あー、酷い目にあった！！」
「うむ、まったくだ」

予想通りに、最初にハル殿と契が落ちてきた。
日向殿曰く、あの機械は何故か最初に女性陣にセクハラ質問を投げ掛け、後から男をじっくりとやるらしい。棚瀬殿が言うには、その仕様は作った人の趣味だろうと言っていたが……、まったくけしからん、もし会ったら褒めてやらんと。
ちなみに二人とも体は濡れていない。
ハルは“スカイウォーカー”の能力でゆっくりこちらに降り立ち、契はそのハルに受け止められたためだ。別に拙僧、悔しくなんかないんだからねっ！

「でも、ゴム球とれるかな？」

ハル殿が心配そうに、自分が落ちてきた所（落ちると同時に蓋がされたため、ハル殿の能力でもあがることはできなかった）を見上げる。
そんなハル殿にフォローを入れる優しい拙僧。

「まぁ黒治なら大丈夫だ。あやつは何を聞かれても平気だろう」
「それはやましいところがないと言う意味で？」
「いや、昔拙僧と女子にどこまでセクハラ発言できるかゲームをや

っていたから性的な恥はあまりない」
「二人とも何やってるの……」
フォローを入れたはずが何故か引かれた。
「つまり黒治なら勝てるってことだよな？」
「うむ、そういうことになるぞ」
「じゃあアタシたちの勝ちか！」
「うむ！」
「これで高得点二個目だね！！」

胡桃殿たちが最早ゴム球をとった同然で喜んでいる。隣の日向殿のチームはまだ二個しかとってないんだからその反応もどうかと思うが。
ちなみにこのギミックに人があまりいなかったのもこういうわけだ。
初めのうちは、どのチームが最初に挑戦するかでかなりのチームが揉めたらしい。しかし何とか権利を勝ち取った日向殿のチームの惨劇と、試験終了まで囚われる、という過酷なルールを目の当たりにしたため、挑戦しようとしていた人が全員違うゴム球を探しに行ってしまったらしい。入り口の複数の足跡はこのためだったのか。
余りにも不憫だったので、ここから学園に帰る道にあるゴム球をいくつか教えてあげた。棚瀬殿も黙認してくれるらしい。

『問題です』

聞きなれた無機質な音声が頭上から響いてくる。さて、黒治にはどんな質問がくるだろうか。

『あなたの身に、小学三年生のときに何がありましたか？』

「「っ！？」」

拙僧とハルの顔が曇る。この機械……。

「んぁ？　どうしたんだ二人とも？」

「小学三年生って言ったら7年前だよね？　そんな昔じゃないんだからコクジ君覚えてるでしょ？」

拙僧たちが顔を曇らせた理由がわからない二人が尋ねてくる。

「むぅ、何と言ったら……」

契が言いにくそうに口ごもる。はたして言っていいものか、と考えるように。

「何か言いにくい事でもあったの？」

「いや、拙僧たちも黒治から聞いただけなんだがな……」

「あ、そうか。二人とも中学からの知り合いだもんね」

「うむ。ただ事が事だけに私たちの口から言ってよいものかと」

「……そこまで深刻な事なんだ」

「本人は『俺って厨二っぽいっ！』とあまり気にしてないんだがな」

あー、まぁ気にしてないなら言ってもいいのかもしれんな。

「んで、結局何なんだよ？」

「黒治はな、記憶喪失なんだよ」

「……」

「……」

「と言っても部分的だし、先程言ったように本人もあまり気にしていない」

押し黙ってしまった二人に今度こそちゃんとしたフォローを入れる拙僧。
それでも何だかいけない事を聞いてしまったような、ばつの悪い顔をしている。

「部分的って？」
「小学三年生前後の記憶、本人が言うには親とかは覚えてたから大丈夫じゃね？　と楽観的だが」
「……つまりどういう事だ？」
「お主は本当にアホの娘だぶはぁ！？」

何も殴らんでも！？

「つまり生活に支障をきたすわけでもないから問題はない、という意味だ」
「それならそうと言えよハゲっ」
「普通にわかるだろ……」
「しかしそのせいでこっちに越してきた、とか何とか言っていたぞ？」
「前住んでた場所はどこだったの？」
「むぅ、それは覚えてないらしい」
「ん？　棚瀬殿、どうかしたか？」
「あ、いえ何でも」

何やら思案顔で下を向いていた棚瀬殿。何だろうか、やはり生徒が記憶喪失だと教師として気になるのだろうか。

「ただ、もう三十秒経っているような」
「ん？」

『時間切れです』
『えっ？　ちょ、わかった性への目ざ』
『ボッシュート』
『うわぁぁぁああ！！」（バシャーン！！）
……どうやら黒治は答える事ができなかったらしい。まぁこれは仕様がないか。

第十三話　話せる俺と、試験終了！

「おう、待ちくたびれたぞ。ったく、シュウがついてながら何やってんだよ？」
「先輩の素敵なギミックのせいですけどね」
「シュウ、学校では田母神先生だろ？」
「何なんですかそのこだわりは……」

俺が地下に落ちたその後、だいたい二十分が経過したら試験終了の時間となり、地上へと続く階段が現れた。
最後の問題を解けなかった俺を責める人間は誰もいなかった。
むしろ魁念と契が『話してしまった、すまない』と俺に謝ってきたぐらいだ。別に隠してるわけじゃないから気にしなくてもいいのに。
まぁそんなこんなで急いで裏山から降りると、田母神先生が麓で待ち構えていた。何でここから降りてくるってわかったんだ？
ちなみに日向さんのチームはあまりにも可哀想だったので、棚瀬先生に救済処置として試験時間を少し延長してもらい、ゴム球を拾いに行っている。田母神先生にも連絡済みだ。

「まぁとりあえずお前たちはミキちゃんのとこ行ってきて採点してもらえ」
「てか田母神先生、あの機械色々と最悪だったんですけど……」
「知らねぇよ、ガキが。あのゴム球全部外注だし、俺は設置しただけだ」
「いや、誰に製作依頼したんですか」
「憶えてねぇ、とにかくさっさと行きやがれ」

……おざなりな態度に釈然としなかったが、採点の結果が気にな

るので、ってかこのまま話してても埒が明かないし、絶対にめんどくさがるような気がしたので素直に美紀先生がいる正面玄関に向かうことにする。

「あれ？　タモガミ先生が採点方法知ってるんじゃないんですか？」
「一回教えたから大丈夫だ」
「田母神先生、やっぱりめんどくさいからって僕に任せましたね……」

やっぱり、あの男はめんどくさい事は絶対にやらないし言わないだろうな……。

◇◇

「あら？」

正面玄関に到着した俺たちを見て、目を丸くする甘粕先生。もしかしてなんかおかしなところあったか？

「あなた……」
「えっ、俺ですか？」

というか視線は俺にしか向いていなかった。俺なんかしたか！？しかし、ジッと見ていたかと思うと、直ぐに何かに納得したような表情に変えて、言葉を続ける。

「いえ、何でもありません。少し知り合いに似ていたもので」
「あ、あぁ、そういうことですか」

クールな表情に戻っている甘粕先生。

先生のような美人さんに見つめられると心臓に悪いからやめてほしい……。

「むぅ……」

ついでに契の視線も心臓に悪いからやめてほしい。

「む……」

更に魁念の羨ましそうな視線も気持ちが悪いのでやめてほしい、切実に。

どうせ睨まれて羨ましいとか思っているんだろう。……なんだかあいつの考えがわかる自分が嫌になる。

「甘粕先生、採点お願いします」

「そうですね、採点を始めましょう」

契のジトーっとした視線と、魁念の考えがわかる自分に耐えかねて、甘粕先生に早く採点をしてもらうよう促す。

そんな俺の心境を知ってか知らずか、すぐさま採点に移行してくれる甘粕先生。

「まず私にゴム球を渡してください」

言われた通りに五つのゴム球を渡す。

ちなみに一個増えているのは、俺の知り合いの鷹に念のため一個ゴム球をキープしといてもらったのを受け取ったためだ。ちゃんと棚瀬先生公認です。

「どうやって採点するんですか？」

「私の能力を使ってですね」

ハルの疑問に軽く答えると、甘粕先生はゴム球を真ん中からきれいに切り取った。

中には千歳飴のように7という数字が書かれている。

「なるほどな。だから甘粕殿が採点係なのか」

魁念が納得したように声をあげる。

甘粕先生の能力は棚瀬先生によると“インタクトカッター”と呼ばれる能力であるらしい。

インタクトは無傷の、カッターは切り取るという意味だ。このような名前からわかるように甘粕先生は、有効範囲内にある物質を傷つけることなく切り取ることができるのだ。

“傷つけることなく切り取る”というのは、有効範囲から出ることが出来れば元の状態に戻るという意味だ。

例えば今朝の田母神先生の頭が取れたのも、現在ゴム球が切り取られているのも彼女の能力のせいである。彼女が能力を解除すれば田母神先生の頭は無事にくっついたし、後ろにある丸いゴム球の山も、一回甘粕先生が能力を解除したので完璧な姿のままなのであるらしい。

七年前の占拠事件では、この能力でテロリストの足や手を切り取り行動力を奪ったらしい。

そのため世間からはその能力と容貌から“泥棒姫”なんてダサい通称をつけられてしまったのだ。

「んで、この数字が点数なのか？」

「そうみたいです。一個二十点満点で合計百点満点となりますね」

「うわっ、じゃあ七点って相当低いじゃん！」

「これはどこのゴム球だ？」

「むぅ、確か魁念が薦めてきたゴム球だぞ」
「「……」」
「拙僧そんな眼で見られるとゾクゾクしちゃう！！」
ハルと胡桃の責めるような視線に身震いする魁念。
コイツの変態レベルがどんどんあがっているような気がする……。
「まだ一個目だから大丈夫ですよ」
そんな魁念の様子を気にした風もなく、甘粕先生が作業を続けながらクールにそんな事を言う。
そうだ、まだ一個目なんだから気に病む必要はないはず！！　あと四個もあるんだ！！
淡い期待をかけて、甘粕先生が切り取るゴム球を見守り続ける。
――９点１０点３点２０点。
「……」
思わず言葉を失う。合計４９点、これは低すぎるんじゃないか？
しかも魁念のお色気シーンを演出したゴム球が満点と一番高い点数なのがなんだか腹が立つ。いや確かにギミックつきだったけれども！！
「んで、結局アタシたちは何位なんだ？」
勝敗やら順位が最も気になる胡桃が甘粕先生にそんな事を質問する。どうせこの点数なら半分にもいってないだろう。
「えっと、２５位ですね」

「えっ！？　マジで！？」

しかし予想外の順位に驚く。

２５位って、半分よりも上じゃないか！！　何でそんな高順位なんだ！？

「あなた方はギミックつきのゴム球を一つ取ったのでこのような順位のようですね」

「でも一個しか取ってないですよ？」

「ギミックのゴム球は全体数が少ないですからね、一個あるだけでも高得点となります。後はこの９点と１０点のゴム球が運がよかったと言えますね」

「マジか……」

つまりあの時苦労したかいがあったという事か！！　何だか省略されたような気がするあの時に！！

触手モンスターとのギリギリの攻防戦を思い浮かべていると、甘粕先生が軽く微笑み、

「それではこれで実力テストは終了です、お疲れさまでした」

と、本当の試験終了の言葉をかけてくれた。

こうして、俺たちの初めてのテストは幕を閉じたのである。

◇◇

後日。俺の元に箕島郷美、野々山佳奈子、天野奈々さんたちが勝ち誇った顔でやって来た。

「黒治さん、あなた方の点数は何点でしたか？」

「げっ！　箕島さんたち……」
「私たちは４６点と、ゴールした時点では５７チーム中２６位でしたわ」
「あ、俺たち２５位の４９点でした」
「……」
「……あのぉ」
「やるわよ」
「「サー、イエッサー！！」」
「えぇ！？　これって完璧に八つ当たりだよねどふぅ！？」
「黙りなさい！！　ギミックつきのゴム球があの時っきりだったのもきっと貴様のせいですね！？」
「酷い誤解だはぁ！？」

そして俺に折檻を入れて離れていった。
何だろう、何で俺が目の敵にされているんだろう……。

第十四話　話せる俺と、マイシスター

彼女の小さく、細い体が宙を舞う。
僕にはやけにそれがスローモーションに見えた。

だいじょーぶ、私にまかせなさい！

彼女はいつものようにそう強く頷き、僕を庇うようにして前に飛び出した。その結果がこれだ。
彼女の体が地面に叩きつけられる。
まるで、命ない人形のように投げ出される彼女の手足。
僕は隠れていた物陰から飛び出して、彼女のところまで駆け寄った。
近くにいた怖い人がケタケタと笑いながら近づいてくる。遠くから女の人が叫びながらこっちに走り寄ってくる。
でもそんな事は気にしてられない。

――ちゃん！　――ちゃん！！

彼女に大きな声で呼び掛ける。
僕の声に答えるように、彼女は大きな耳を動かしながらこちらに微笑を向ける。

あぁ、こんなに血が。だいじょうぶ？　たすかる？

そんな言葉をかけることしか出来ない。
無力だ、と幼心に実感させられる。

こんな能力じゃなかったら。

そんな言葉が頭を駆け巡る。
後悔、そして自分を侮蔑する言葉だ。

こんな能力じゃなかったら。

彼女は宙を舞わなかった。
彼女を助けることができた。

こんな能力じゃなかったら。

彼女と、これからも一緒に歩む事ができただろう……。

◇◇

目覚ましが鳴る前に目が覚める。
まだ五月前、暑いとは言えない季節だが、俺の体は汗でべっちょりと濡れていた。

「最近は見なくなったと思ったのにな……」

契や魁念と知り合った頃から見るようになった夢。幼い少女の惨劇と、自分を責めるような内容。
こんな事は記憶にない、と割りきれればいいが、俺には小学三年生の記憶がない。
いや、正確に言えばその付近の記憶がなくなっている。幼稚園の頃に会った出来事や、住んでいた場所は今と違ったな、などということは思い出せる。
中学生のころは、『まさか、俺の隠された能力が覚醒しようと！？』などと厨二ぶって楽しんでいたのが今では懐かしい。

「機会でもあったら調べてみるかな～」

率先して調べてみようとは不思議と思わなかった。

夢の内容が気にならないのか、と聞かれれば気になると即答するだろう。

しかし、何故だか調べちゃいけない、という謎の気持ちが自分を引き留めるのである。

……まぁとりあえずこの話題は終了。汗に濡れた気持ちの悪いシャツを脱ぎ、シャワーでも浴びに行こう。

「お兄ちゃんおはよう」

「うぉう！？」

唐突に枕元から声をかけられて驚く。右を見るとニコニコと笑みを浮かべながらこちらを見ている、純白の少女がいた。

「お兄ちゃんうなされてたけど大丈夫？」

「シロか……、お兄ちゃんの部屋に勝手に入ってきちゃダメっていつも言ってるでしょ？」

「あぅ、ごめんなさい」

この少女の名は桜庭白那（シロナ）、小学四年生の俺の妹だ。

真っ白な肌と白髪と呼ぶには不躾な程純白の髪、それと対照的な真っ赤な瞳と、まるでユキウサギのような少女である。なんでもアルビノ化？　とかいう先天性の色素欠乏症にかかっているため、このような出で立ちなのだ。

「シロ、お前笑いながら謝ってるんだけど俺の言ってること理解してる？」

「お兄ちゃんお兄ちゃん、聞いて聞いて！」
「あ、理解してないなお前」

いつもニコニコしながら喋る妹を怒る気にもなれず、シロの次の言葉を待つ。

「お兄ちゃん最近シロに構ってくれないよね？」
「あぁ、ちょっと学校で色々あってな」
「だからねお兄ちゃん」
「ん、なんだシロ？」

今日は早く帰って来てシロと遊んでね！　とかかな？　まったく、可愛い妹だ――

「お兄ちゃんを監禁することにしたの！」

――ったのになぁ……。

「シロ、監禁ってどういう意味か知ってるか？」
「うんとね、人を一定の区画された場所に閉じ込め、そこから出る自由を奪うこと」
「お兄ちゃんシロが予想以上に意味をしっかりと把握しててびっくりしたよ」
「えへへぇ」

頬を赤く染めるシロ。白い肌のせいか、頬をさす朱がよりシロの可愛らしさを引き立てている。
いやぁ、状況が状況じゃなかったら非常に可愛いのに。

「えっと、シロ。お母さんは何て言ってた？」

「頑張りなさいって！！」
「じゃあお父さんは？」
「しくじるなよって！！」
「家族公認！？　まさかの家族公認なの！？」
「それにそれも貸してくれた！」
「それ？　おぉっと……、お兄ちゃん余りにも衝撃的過ぎて上手い言葉が見つからないよ」
「えへへぇ」

別に褒めたわけじゃないのにまたまた顔を赤くするシロ。
俺の右手にかけられた黒い手錠がなかったら非常に可愛いんだけどなぁ、本当に。ちなみにもう片方はパイプベッドのパイプ部分にしっかりとかけられていた。
……ヤバい！　俺の家族いろいろとヤバい！！
そんな俺の心境を知ってか知らずか、シロがニコニコと俺の寝巻きに手をかけてくる。

「だから今日はシロがお着替えさせてあげるね」
「シロ、お兄ちゃん今日は着替えたくない気分なんだ」
「じゃあシロが歯をみがいてあげるっ」
「お兄ちゃん片手使えるからそっちでや――」
ガチャン！！

言うやいなやもう片方の手にも手錠をかけられる。へ、へたこいたぁ！！

「あ、あははぁ、シロ。これじゃあトイレにもいけないなぁ」
「大丈夫！　シロがの――」
「言わせないよっ！？　さすがにそれは言わせないよっ！？」
「――こさず尿瓶に入れるから！！」

「誰か違う方を想像しちまった俺を殴ってくれ！！」
実の妹になんて想像をしてしまったんだ俺は！！
「お兄ちゃんどうしたの？」
「ちょっと自分に嫌気がさしてね……」
シロが心配そうにこちらを覗きこむ。うぅ、なんていい妹なんだ……。
って監禁してる妹にいいも悪いもあるか！？　とにかくこの窮地を脱しなければ！
「シロ、お兄ちゃんお腹がへったんだけど」
「じゃあシロが持ってくるね！」
「そうなりますよねー」
そう言い、トテテと部屋を飛び出すシロ。早くも画策失敗。
しかしこれによって今この瞬間はシロが部屋にいない！　今なら脱走のチャンス！！
「どうせ親父が渡したのだってレプリカだろ」
手錠から手を無理やり引き抜こうとする。レプリカとかおもちゃだったらこのくらいの力で簡単にハズれるはず！！
ガチャ！　ガチャガチャ！！　ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ！！
「……あれ、これモノホンじゃね？」
俺の親父は警察官だからなぁ、本物だって持っていてもおかしく

はないはずだよな。そして俺の監禁の手助けのためにシロに貸したと。うん、なんらおかしくないな。
……いやおかしいだろ！？　何でお兄ちゃんを監禁する～とか言ってる妹に本物の手錠渡してんだよあのおっさんは！？

「いや、まだ慌てるような時間じゃない！」

思わずどこかのバスケットマンのようなセリフが口から出る。
そうだ、しっかりしろ俺！　シロが階段を上がってくる音はまだ聞こえていない！！　次なる手段を考えるんだ！！
なんて前向きに考えていると、部屋の窓ガラスをコンコンと叩く音が聞こえた。

『何やらお困りのようだな』
『俺たちが助けてやろうか？』
「カラスに燕！！」

窓の外を見ると、ありがたいことにカラスと燕がワンセットで立っていた。
いつもははた迷惑な存在なのに今回は輝いて見える！！

「悪い、助けてくれ！」
『へっ、任せな！』
『だからここの鍵を開けておくれ！』
「無理です届きません」
『『ですよねー（笑）』』
「てめぇら茶化しに来やがったな……」
『『Ｅｘａｃｔｌｙ！』』
「ようし、そこを動くなよ？　後でお前たちを焼き鳥にしてやるから」

『そんな事言ってる暇あるのかなぁ黒治？　階段を上がってくる音が聞こえてるぞ？』
「えっ、マジで！？」

耳を澄ますと確かに階段を上がってくる音が聞こえてくる。というか上がりきった。
こいつらにおちょくられたりしてる間に戻って来ちまったのか！
くそぅ、まだ何の光明も見えてないのに！！
とりあえず脱走を謀ろうとしたことを悟らせないためにこやかに接しないと！！

「お兄ちゃん……」
「おう！　どうしたんだいシロっ？」

爽やかさ満点でシロに振り返る。
しかし戻ってきたシロは何故か半ベソをかいていた。Ｗｈｙ？

「……本当にどうしたんだシロ？」
「あぅぅ、お母さんが、お母さんがね」
「お母さんが？」

母さんに怒られたりしたのだろうか？　でも母さんは俺の監禁推奨してなかったっけ？

「部屋で、ひくっ、ご飯なんて食べたらぁ、ぐすっ、部屋が汚れるってぇ。バカやってないで、うぐっ、お兄ちゃん連れて降りてきなさいってぇ、ひぐっ」
「……」

そうぐすぐす鼻をすすりながら手錠の鍵を使って俺の手を自由に

するシロ。
あのババア。最初はイケイケだったのに飽きたとたんに態度変えやがって。シロが可哀想じゃないか。
「だから、うくっ、手錠、はずすねぇ」
しょんぼりとしながら手錠をはずそうとするシロ。
両親は共働きで帰ってくるのは夜遅く。シロは体のことがあるから早く家に帰らなければならない。つまりシロは俺が学園から帰ってくるまで一人で過ごさなければならないのだ。
きっとシロは寂しかったのだろう。その寂しさがシロにこのような奇行に走らせたのに違いない、と今なら思える。
「……シロ」
「？　なぁにお兄ちゃん？」
すっかり意気消沈した顔で俺の方を向くシロ。
そんな妹のために俺ができることは……。
「……シロ、一人が寂しかったんだろ？」
「ふぇっ。な、何でわかったの？」
「わかるさ、お兄ちゃんなんだから。……だからさシロ、今日は一日シロと一緒にいてあげるよ」
「お、お兄ちゃんっ！！」
シロが歓喜したような声をあげ、明るい表情になる。
うんうん、シロはやっぱりこうじゃなきゃなっ！
「ほんとに、ほんとに今日はずっと一緒にいてくれるのっ！？」
「もちろんさ！」

「一緒に遊んでくれるのっ！？」
「もちろんさ！」
「監禁もいいのっ！？」
「も、もちろんさ！」
「お兄ちゃん大好き！！」

パァッと花が咲いたように満面の笑顔になるシロ。
この笑顔を守れるのなら監禁だってなんだってしてやらぁ！

「じゃあシロ、もう一回お母さんにお願いしてくるねっ！」
「お兄ちゃんも一緒に行って説得しよう。俺も一緒に頼めばきっと認めてくれるさ！！」
「お兄ちゃん！！」

俺に抱きついてくるシロ。
あぁもう！　コイツは可愛いなぁ！！

「よし、行くかシロ！」
「うんっ！！」

俺たち兄妹は手を繋ぎ、理想の監禁生活を実現させるために親を説き伏せに出陣した……。

『……黒治は何がしたかったんだろうな？　あのままだったら監禁から逃れたのに』
『シスコンだからなぁ。行動基準が時たま妹になるんだよ、あいつ……』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0534w/

話せる俺と、騒がしい学園生活

2011年10月13日08時12分発行